「巻き込まれ親父の撤退」

作　藤次郎政秀

作者：お断り。

＝この物語は、今、私達が居る世界とは違う世界の話です。しかし、今流行りの〝異世界モノ〟とも違い、別の平行宇宙の世界の話です＝

●プロローグ、海の見えるホテルのカフェテラス

収穫の季節が過ぎ、国中収穫祭に向けての賑わいで活気づいていた。日の当たるホテル付属のカフェのテラスで男がテーブルに置かれたコーヒーの傍らに新聞を広げ、パイプを咥え燻らしながら海岸を望む。

時折涼しい海風が吹いてくる…それが心地いい風なのだが、パイプの火皿から立ち昇る煙が風向きによっては、自分の顔に流れてくるので、それを防ぐために、パイプの咥える位置を変えてみたり、タバコの燃焼調整にタンパーと呼ばれる器具をパイプの火皿に入れてタバコの火をコントロールしていると、ふと声をかけられた。

「あの…〝准尉〟じゃないですか？」

男が被っていた帽子のつばを、タンパーを持った手で少し上げ、声の主を訝しげに見ると、そこには背の高い中年の女性が居た。その顔を見て〝准尉〟と呼ばれた男は意外そうなしかし、嬉しそうな顔をして、

「あれ？もしかしてＫＴ？」

と返事をすると、その言葉に安心したのか、

「結婚して今は、〝ＴＴ〟ですよ。お久しぶりです」

と微笑んで言った。

「まさか帝都の外で合うとは」
男は嬉しそうに鼻髭を手で擦りながら言うと、
「本当に…こんなところで…何年振りでしょうか？」
女がニッコリ笑って悪戯っぽく聞き返す。
「ざっと、十数年…ってところか…急いでないのなら座りなよ」
とパイプを持った手で向かいの席を勧めた。
「じゃ、お言葉に甘えて」
女が男の前の席に座ると、男は近くを歩いていたウェイターを呼びとめ、
「なにか飲む？」
「じゃ、私もコーヒーを」
「畏まりました」
と、ウェイターは答えてカウンターに向かった。席に座る女…結婚してＫＴからＴＴになった彼女を見つめて、
「君は変わらないねぇ…」
男が方眉を挙げながら言うと、
「あら、ヤダ…もう立派なオバサンですよ！」
と笑いながら謙遜するが、まんざらでもなさそうな顔をしていた。
「よく俺とわかったね？」
「それは、そのトレードマークの帽子とパイプ…そして愛用の独特のパイプタバコの香り…それから、その道具（男の持っているタンパーを指して）の仕草で判りました」
ＴＴは悪戯っぽく言う。
「ハハハ、そうかね…ところで、旦那さんと子供は元気かね？」
男はニコニコしながら訊ねた。この男と女はかつての職場で同僚であり、男は女が結婚後、

子供を連れて男の職場に来たのを覚えていた。
「はい、元気ですよ。あれから、２人子供が生まれました」
「それは、おめでたいね。ここには旅行で？」
「はい、実家に用事があって、私一人で向かっているところです」
「実家？ＴＴはこの地方の出身？」
「いえ、沖にある島の出身です。ここから連絡船に乗って行きます」
「へぇー、そうなんだ。君の故郷はここから船で行くんだ」
「はい、本来なら昨日の朝に空路でここに着いて、その日の夕方にここの港を出港する連絡船に乗る予定だったのですが、予約していた飛行機が急遽欠航になり、仕方なく鉄道で昨日の晩ここに着いて、一泊して今日の朝の連絡船に乗る予定なのです」
「それは大変だったね」
「で、准尉は？」
『准尉』は、やめてくれ！もう退職したんだ…今は職探しのプータロー…失意の旅だよ」
男が苦笑いをしながら言うと、ＴＴは驚いて、
「まぁ！退職されたのですか？」
「定年でね。まだいけると思ったけど、あの民兵会社の職場にはいろいろあったので…」
「あっ…（察し）、お疲れ様でした」
ＴＴは、元居た職場と男の内情を察し、深くは聞かないことにした。
やがて出てきたコーヒーを飲みながら、談笑を続けた。
「じゅん…いやＨＧは何時から？」
「俺は、数日前からここに逗留している。学生の頃、ここにある大学に通っていたんだ。で、久々に訪れてかつての街並み等の懐かしい場所を巡ったり、当時お世話になった大家さんの墓参りとか…あと、ここに来たついでに会社の支部長のＹＭ…あいつは俺の大学の後輩

でね…でここに来たついでに会おうと思って支部を訪れたが、その時は生憎彼女が県庁に呼び出されたとかで会えず、今日また支部に行く予定なんだ」

「そうですか…あれ？ＳＴ支部長（ＴＴが現役の頃の支部長）は？」

「ＳＴ支部長？随分前の人だね。あの人は、とうに辞めたよ…定年退職でね。その後、就いた支部長は本部との折り合いが悪くてどれも長続きせず、結果今の支部長にＹＭが中途採用されて、着任前に本部で業務説明している時に、彼女と再会したが邂逅するまでもなくすぐに彼女は赴任してロクに話す機会がなかったので、昔話でもしようかと…」

と言っている最中にＨＧはＴＴがなんとなく不機嫌そうな顔をしているのを感じた。

ＨＧが「どうかしたか？」と訊ねると、ＴＴはその言葉に小首を傾げて「ん？」と言った。彼女はよくこの仕草をするが、この時の「ん？」の語調と目が笑っていない事がＨＧには分かった。ＴＴはＨＧの話に、

「へーぇ、そうなんですか！後輩さんなんですね…女性の…それでわざわざ…」

この「女性」と尋問口調で言った言葉に棘を感じた。ＨＧは（なんで、嫉妬しているのだろう？）と思った。

「俺、何か失礼なこと言ったか？」

と、ＴＴに訊ねると、ＴＴはすました顔で「なにも…」と答えた。

なんか気まずい雰囲気になり、二人とも黙ってＨＧはパイプをくわえ、ＴＴはコーヒーを口にした。

突然、街中でいくつかの爆発音がして、周囲が騒がしくなった。

「なんだ？こんなところでテロ？」

ＨＧが「テロ」と言った理由は市街地を見ると数条の煙が上がっていた。ガス爆発なら、複数個所に煙は上がらないと考えたため。ホテルは市街地郊外にある国際港の近くにあり、

爆発の影響から免れていた。
「とにかく逃げないと！」
とＴＴが言う。ＴＴも現役の頃、民兵として従軍した経験があるので、次の攻撃を回避する事を優先した。
「そうだな、ウェイター、代金を置くぞ！彼女と二人分だ。釣りはいらねぇ」
「ご馳走様！」
と、ＴＴはちゃっかり言って、二人はそれぞれの部屋に向かい、荷物を取ると別に待ち合わせたわけではなく、ホテルのロビーで合流した。
それぞれ急いでチェックアウトすると、
「ＴＴ、港まで送ってくよ」
「それは心強いです。私からもお願いします」
共に仕事で戦場と言う修羅場を潜り抜けていたので、二人でホテルを後にした。

港に向かう道すがらタクシーを拾おうとしたが、つかまらず、徒歩で港に向かう。
…この時は、二人とも何が起こったか知らない。

●同時刻、Ｆ県領地空港
空港に輸送機が降り立ち、そこから戦闘服に身を包み、武装した２個分隊計１６人（１分隊８人構成）が２台のトラックと共に空港に降りる。輸送機は荷物と部隊を降ろすとすぐに離陸した。
部隊長を出迎える同じく戦闘服に身を包み、武装したＹＭ。敬礼するＹＭに対して指揮官は答礼をしながら、
「出迎えご苦労様、本部のＩＦです」

と指揮官が言った。
「帝都から遠くはるばるようこそ、当地の支部長のＹＭです。お噂はかねがね…」
「えっ？あたしの事を知っているの？」
「はい」
お互い初対面である。驚いたＩＦは自分の悪口を言いそうな本部の人物の顔を何人か頭の中に浮かべ、一番言いそうな人物の名を出した。
「ＨＧからでしょう…どうせ、ロクな話じゃないでしょうけど…」
「いえいえ…ＨＧ先輩とは私の入社時の事務説明の時に本部で一度会っただけです。ＩＦ隊長の事は、本部のＭＭ営業マネージャーから聞いていますので…」
「…どのみち、ロクな話じゃないことは想像がつくわ…ところで、ＨＧを『先輩』と言ったけど、なんで？」
と、ため息交じりに言ったところで、爆発音を聞く。

爆発音を聞いたＩＦは何かを察し、自分の部下と出迎えたＹＭの部下に対して「全員乗車！すぐに出発！」と言って、トラックに乗り込むと一目散に空港を後にした。その３０分後、空港は正規陸軍により占拠される。
トラックの一台にＹＭと共に乗り組み出発したＩＦに
「何があったのでしょうか？」
と訊ねるＹＭに対して、ＩＦは
「テロよ…こちらの想定した時間より早く始まったようだけど…」
「テロ？」
「そうよ！」
聞き返すＹＭに対して、ＩＦは「(何を言ってる？)」と思いつつ返事をした。その言葉に

ＹＭはパニックになり、
「わっ、私は、外務大臣とＣ国大使の要人警護任務としか聞いていませんが！」
と言う言葉にＩＦは驚いて
「何だって？あたしは外務大臣とＣ国大使に対するテロが企図されていると言うことであなたの部隊の増援で来たのよ！」
「そ…そんな話…聞いていません！」
とＹＭは悲鳴に近い言葉で言った。それを聞いてＩＦはトラックの窓の方を向いて「チッ！」と吐き捨てた。
本部が支部に対して、正確な情報をわざと隠して伝えないのは、以前ＩＦが他所の支部長をしていた時に何度も経験していた。結果支部に損害を与え、支部の閉鎖と支部長の役を解任されて一部隊長に降格され、生き残った部下と共に本部に併合された苦い経験を思い出した。
「隊長、どうします？」
運転席の部下が聞いてきた。
「そうね…あたし達は民兵会社だから、地元の正規陸軍の駐留部隊と合流したいところだけど…あんた（ＹＭ）の話から察するに、誰が味方かまだ判らないから、取り敢えずこのＦ県領地の半島の道を東に進む」
ここで、素直にＩＦが正規陸軍の駐屯地に向かわなかった判断は、今まで受けた本部からの仕打ちによる経験によるモノで、何をされるか、何をするハメになるのか分からない内は安易に動かずにジッとしているのが正解と考えたからである…もっとも、爆発音とテロの情報から、次は飛行場が標的にされる可能性があると判断し、まずは飛行場から出て退避する判断を実行した。
「エッ？このＦ県領地の半島を隣のＳ県領地に抜ける西の街道に向かうのでは？」

ＹＭが訊ねると

「そうね…これが、自然災害ならねぇ…海を挟んだ隣国のＣ国は未だに反政府組織が跋扈しているし…ここ（Ｆ県領地）は、海を挟んでいると言っても、Ｃ国に近いし…テロリストがＣ国反政府組織と言う事もあり得るし、多分、街道は軍か警察かテロリストによって閉鎖されていると思う…そこに、戦闘服を着た私達が行ったらどうなる？」

トラックの窓から窓の外の市街地を見つめながらＩＦが答えた。ＩＦの居る位置は、市街地を挟んでＨＧ達の反対側…ＩＦからも市街地の数条の煙が見えていた。

「テロリストなら、捕まって殺されますねぇ…」

ＹＭはシュンとして言う。

「でしょ？だから、一旦隠れるの」

ＩＦは相変わらずトラックから外を見ているまま、市街地の数条の煙を見て、何があったのかと想像を巡らせていた。

「隠れて…それから？」

と、オロオロして言うＹＭに

「状況次第ね…もしテロリストがここ（Ｆ県領地）を占拠するのなら、頃合いを見て、民間人に紛れて脱出を図るわ。たった２個分隊で何ができると言うの？」

とＩＦは吐き捨てるように言った。それを聞いたＹＭは一言

「…そんな…」

と漏らしただけだった。

●Ｆ県領地国際港

一旦、ＨＧとＴＴは連絡船の発着する波止場に着くが、波止場は既に正規陸軍により閉鎖されていた…

「…そんな…」

と言って、その場に座り込むＴＴに対して、武装した兵士が銃口を向けて「ここから立ち去れ！」と威嚇した。ＨＧはＴＴの腕を抱え立たせると、悔しそうに侮蔑の目を向けながら、波止場の道を帰っていった。

ＨＧはＴＴと近くの小さな公園に入り、ベンチに座った。

「…さて、どうするか…」

空を仰ぎながらＨＧは呟いた。続けて

「港が閉鎖されているとなれば、一旦市街に行くか…そこから鉄道か主要幹線道路で安全圏にまず逃れることをしないとね」

「そうですね」

ＴＴはうつ向いたまま、心ここにあらずの空返事をした。

「ドンパチが収まるまでそのままここに留まってもよさそうだけど…正規陸軍の反撃の巻き添えになるのは嫌だなぁー」

この時点では、ＨＧは正規陸軍が港を閉鎖しているのは、爆弾テロの犯人を逃がさないためだと考えていた。

「そうですね」

まだＴＴはうつ向いたまま空返事をしたが、ＨＧと一緒に考える気になってきたようである。そのＴＴの気を逃さずＨＧが

「ここで、質問！」

「ハイ」

ＴＴは、突然の事に驚いてＨＧに向き直った。

「ＴＴは、どうしても今故郷に行く連絡船に乗る理由を差し支えない程度でいいから教えてくれるかな？」

「…それは…病気の母が入院先から一時帰宅を許されたので、家族皆で揃おうって…姉達も故郷に帰ってくるので」
「おねぇさんは確か二人いたよね…二人供？」
「はい、二人とも…一昨日実家に帰っています。私は遅れて行く事になっています」
「そうなんだ…家族全員揃うのは嬉しいよね」
「ええ、家族一同揃うのは、数年ぶりです」
と嬉しそうに答えた。それを見たＨＧはＴＴが元気を取り戻したと思い
「では、現状の整理分析をしよう…」
「はい」
今度はＴＴも真剣にＨＧの話に向き合った。

「ホテルで見た爆発は、事故の類ではないよね」
「そうですね」
「あの爆発のあと、次の爆発はまだ起こっていない」
「はい」
「あの爆発は多分テロだよねー、砲撃の類じゃないと思うが」
「私もそう思いますが、何故でしょう？」
「テロリストの目的はこれだと思う」
と言って、ＨＧはスーツの上着の懐から新聞を取り出し、その一面を指で示した。
「地方新聞だから、大きく載っている…昨日から現地入りした地元出身の外務大臣がＣ国の大使を招いて、朝からの会談の後で、午後記者会見が高級ホテルで行われる予定らしい」
「テロリストの目的はこの二人…」
「多分、今のとこ考えられるのはね…この二人を人質にとって何を要求するのか知らんけ

ど」

ＴＴは口に手を当てて考え込んだ…

「だとすると、今半島（ＨＧ達が居るＦ県領地は半島になっている）の付け根から隣のＳ県領地に行けば安全圏に脱出できますね」

ＴＴが縋る様にＨＧに訊ねた。ＨＧは訝し気に首を傾げると

「…そうだといいけど…」

「何か、不安でも？」

「さっきの波止場での正規陸軍の動き…どうやら、テロ活動が始まる前に波止場を抑えたとしか思えない迅速さだな」

「迅速…？」

「正規陸軍の駐屯地は、この港の先の市街地のさらに先の場所にあるんだ。駐屯地からテロの爆発音を聞いて装備をまとめてからこんなに早くここまで展開できない」

「確かに、完全武装していました。でも、事前にテロの計画を察知して逃亡を防ぐために港を抑えたのでは？」

「それも、ありかなぁ…昔の感が戻ってきたね」

「ええ…除隊して子供産んですっかり鈍ってしまっていたようです」

と言って、ＴＴはニッコリ笑った。

「もし、テロの計画を察知して逃亡を防ぐために港を閉鎖したとなれば、鉄道はおろか主要幹線道路も閉鎖されているだろうな…」

「…そうなりますね」

ＨＧの話にＴＴがシュンとする。

「ここで得られる情報は、少なすぎる…市街地に観光旅行に行ってみるか？ドンパチに巻き込まれるのを覚悟して…それとも、さっきのホテルに戻ってテレビでも見て情報を集め

るか」

ＨＧの考えは、市街地に行って情報収集する事を決めていて、ＴＴが同意しないのであれば、ＨＧはＴＴをホテルに送っていき、そのまま別れて行動する気でいた。

「それって…私を誘っています？ドンパチ見物に」

ＴＴはニッと笑ってＨＧの顔を覗き込むように訊ねた。ＴＴもかつては戦場に身を置いた事がある。ＨＧが戦場に入り込んで情報を収集する事を選択したのを見抜いた。

「そうだよ」

ＨＧの意思が自分の考えと同じであることを確信したので、ＴＴは覚悟を決めて

「では、市街地観光とドンパチ見物に行きますか」

「では、決まり」

と言って、ＨＧはベンチから立ち上がり、ＴＴに手を指しだした。ＴＴは微笑んでＨＧの手を握って立ち上がった。

●Ｆ県領地市街地とＨＹ

ＨＧとＴＴは徒歩で市街地に入った。

２人はまず、駅を目指したが駅も港同様武装した正規陸軍によって封鎖されていた。仕方なく、途中のショッピングモールで運よくコインロッカーを見つけ、荷物を押し込んだ。そして、二人ブラブラと市街地を見て回った。市役所、市民大ホール、皇立大学等主要な施設と思われる場所を巡ったが、いずれも正規陸軍や警察が包囲している様には見えなかった。

また、爆発現場と思わる場所を途中一か所発見し、近づくと道には規制線が敷かれていて、警察官が立っていた。現場検証をしている警察官に聞くと「ガス爆発」との事。規制線越しに見える爆発現場はどう見ても雑居ビルに見えた。ＨＧはメモに番地を控えて立ち去る。

ＨＧは「（そもそも…この同時爆発はテロなのか？仮説の前提条件が間違っているのではな

いか)」と考え始めた。

取り敢えず、二人は荷物を預けてあるコインロッカーがあるショッピングモールに戻ってきた。その間、ＨＧは考え事をしていた。

「スミマセン歩き疲れました…」

ＴＴの言葉に我に返って、

「…おお、スマン！自分のペースで歩いてしまって…疲れたか？」

「はい…」

「そこのフードコートで休もう」

「スミマセン…准尉は健脚ですね」

「ああ…一日一万歩以上歩く事を自分に課している」

「い、一万歩！どうりで」

ＴＴは驚いて言った。

フードコートの入り口でＨＧは「書店に行ってくる、先に席を取っていてくれ」と言って、ショッピングモールに消えていった。

ＴＴがＨＧの分もコーヒーを注文し、トレイに乗せて席に座り、フッと軽いため息をつく。そして、周囲を見回そうとした時、隣の席から大きなため息が聞こえた。

「あー、帰りたくない！」

ＴＴは何か聞き覚えのあったような声に驚いて、ため息の主を見ると、テーブルに突っ伏している向こうもＴＴを見ていた。目があった瞬間、二人とも「(確かどこかで見たような…)」と記憶の検索を始めた。

やがて、

「もしかしてＨＹ？」「ＫＴ？」

と同時に言った。同時に名前を呼ばれたので、確信し。

「あらー、懐かしい！」
「どうして、こちらに？」
と話し出した。ＴＴの隣に居るのはＨＹと言って、民兵会社でＨＧが教官として新入社員から教育した女性である。訓練終了後ＨＧはよく新人達を連れて社外で飲食をしており、その中に同じく教官のＴＴも居たので、二人はよく知っていた。ただ、ＨＹが民兵会社を辞める以前にＴＴが結婚退職したので、ＴＴはＨＹが民兵会社を辞めたことを知らなかった。
「私は、実家に帰るのでこちらに立ち寄ったのよ」
「旦那さんと一緒に？」
「なんでそう思うの？」
「だって、テーブルの上にコーヒーの入ったカップが二つあるので」
と、ＨＹが指摘したので、ＴＴは「(ウフフ…ＨＹをからかっちゃお)」と思いつき
「…うふふ、バレたか！」
と言って、ＴＴは悪戯っぽく笑うと
「そう、素敵な旦那様よ、じきに来るわ。ＨＹは？」
と続けた。
「私は、ショッピングモールに買い物に」
「会社（民兵会社）は？」
「とうに辞めました！」
「あらっそうなの？元気そうね」
「おかげさまで」
などととりとめのない会話をしている間に、書店の袋を持ったＨＧが現れる。
「待たせた」
声の主にＨＹは驚いて見上げる…それも上目遣いで…ＨＹは背が低いのでいつも人の顔

を視る時には下から覗き込むような上目遣いをする。それがチャームポイントでもあるが、当のＨＹは近眼で目を凝らしているためでもある。それが癖になっているので、眼鏡やコンタクトレンズをしていても、同じ仕草をする。

ＨＹを見てＨＧは

「おや？お前ＨＹか…久しぶりだな、こんなことで会うとはね。Ｓ県領地からわざわざこっちに来ているとは」

と言った。ＨＧはＨＹの実家がＦ県領地の隣のＳ県領地にある事を知っている。ＨＧの言葉に、

「覚えていましたか！」

とＨＹが驚いた。隣に居たＴＴも驚いていた。

「可愛い教え子の出身地は皆覚えているぞ」

と得意げに言うＨＧにＴＴは

「どうせ、女の子だけでしょ！」

と言い放つ。するとＨＧは苦笑して

「バレたか！」

と言って笑った。ＨＹも笑顔になった。しかし、急に真顔になって、

「ＫＴの今の旦那さまって、准尉？」

とＴＴに訊ねた。ＨＹはＴＴが結婚退職をしたのを知っているので、離婚してＨＧと再婚したのだと勘違いした。それに対して「ん？」ＴＴは小首を傾げて言ってほほ笑んだ。

「そうなのぉ…再婚したの？ＫＴ」

ＴＴの「ん？」をＨＹが肯定の意味ととった。それに対してＴＴが

「そうよーぅ、良い旦那様でしょ？」

と言った。それを聞いていたＨＧは目が点になった。ＨＹは複雑そうな顔をして、ＨＧを見

つめた。
「おいおい！ＴＴ」
とＨＧ言うと、ＴＴは笑い出し。
「冗談が過ぎた様ね！准尉とは実家に帰る途中に今朝、偶然ホテルで出会ったの…安心して。それから、私は、今は〝ＴＴ〟よ！」
と言った。
「ホテルで…と、怪しいなぁ」
「こらこら…ＨＹやめてくれ、俺もこっちへの旅行の途中で今朝ＴＴにあったんだ」
「ハイハイ…そうゆうことにしておきましょ」
と言って、ＨＹはテーブルに手を組んでそこに顎を乗せてＨＧを責めるような眼を向けた。
ＨＧも席に着き、お互い近況を話し合った。

ある程度話が終わりかけた時に、ＨＧは書店の袋からＦ県領地の観光地図、地勢図、道路地図を出した。そして、ＨＧとＴＴが今朝ホテルからここまで来た話を始めた。ＨＹはＨＧとＴＴの話を聞いて、
「わたしは今朝早く隣のＳ県領地の実家を出て、こちらに来ましたが、別に何も…ああ、途中道が封鎖されている場所がありましたね」
それを聞いてＨＧは道路地図を見せて「どこ？」と訊ねた。ＨＹはためらいもなく市街地内の街道沿いの一か所を指さした。ＨＧはそこに赤ペンで×印をつけた。
「そこって、どういう所？」
と訊ねると、ＨＹは
「えーと、確かオフィスビル街の一角…だったような」
と曖昧な答えをした。ＨＧは続いて、今まで見てきた爆発現場に×印をつけた。それを見た

ＨＹ。なにかあると思いＨＧに対して
「なにが起こっているのですか？」
「テロらしいのだけど、この平和な市街地を見ると、そう感じなくて…でも、港と駅は正規陸軍によって封鎖されている」
ＨＧは困ったという表情をして答えた。
「それなら、一度県外に出ますか？私車で来てますから。『如何なる手段を以てしても逃げるに如かず』…とよく准尉が言っていましたよね？」
「そうだね…あまりいい意味で使ってはいなかったが…」
教え子のＨＹが、民兵会社の教育でＨＧが話していた古代の兵法を引用したので、嬉しそうに笑った。

●回れ右！行先山の中！
ＨＧとＴＴはコインロッカーから荷物を取り出し、ＨＹの車（軽ワゴン車）に乗り込み、半島の外に向かう幹線道路を走るが、程なく渋滞に出くわす。ＨＧが歩いて渋滞の先を見に行くと、検問所が設けられ、来た車は半島側に戻されていた。
「やっぱり…な」
と言って、ＨＧは車に戻り。
「ＨＹ。やはり街道も閉鎖されている。Ｕターンだ」
ＨＧはＨＹに指示した。
ＨＹはＳ県領地に戻るため、途中地元民しか知らない裏道も試したが、それらはバリケードが築かれて閉鎖していたり、正規陸軍の兵士がいたりして、県外に出られなかった。
ＨＧ達は再度市街地に戻り、手分けして銀行や百貨店のＡＴＭから限度額の現金をおろ

した。コンビニエンスストアのＡＴＭを使わないのは、監視カメラがテロリストに抑えられている可能性があり、銀行の監視カメラは普段でも特別な令状がなければ警察にもビデオ映像を提供しないことを知っているので、まだテロリストに抑えられていないと思った。

次にＨＧは、家電量販店に入り、ゴルフ用レーザー距離計、双眼鏡、ソーラーパネルと蓄電装置、小型ドローン、ヘッドマウントディスプレイを現金で購入。現金で買うのは、カードを利用して利用履歴を残すのを避けるため。また別の家電品店や玩具ショップ等で同型の小型ドローンを1店舗につき一機ずつ、計5機購入する。ＤＩＹショップでは、小型カセットコンロとカセットガスとミネラルウォーター、フリーズドライ非常食を購入。

それをＨＹの軽バンに乗せる。

「こんなに買って、どうするのですか？」

と呆れるＨＹに対して、ＨＧは

「山籠もり」

とシレっと言った。

ＨＧはＨＹに半島内陸の山間部に向かわせた。

山間部にあるガソリンスタンドで給油し、近くのドライブインで作戦会議を始めた。

「さて、今まで見た話を整理しよう…」

とＨＧは地図を広げた。

「フフフ…准尉の〝親父モード〟が出てきましたね！」

ＴＴが悪戯っぽく言った。

「よ、よせやい！」

ＨＧは照れてしまった。

ＨＧは約２０年程前に、政府軍…後に正規軍と改称される軍隊に居た。軍時代でのＨＧの所属は機甲師団の特殊車両試験部隊に所属し、改良された素材や武器や機能・機構を組み込んだ戦車や装甲車等の軍用車両のテストをすることで火器・兵器の扱いを身に着けた。その間に戦術・戦略の参謀教育や工兵教育などの多種多様の兵科の教育・訓練を受け、習得していた。

また実験部隊として近隣諸国との戦闘にも度々参加したことがある。

皇国と近隣諸国との和平が進むにつれ、また国連の働きにより、それまであった徴兵制度が無くなり、軍縮が進み、軍組織の構造改革とやらで、リストラされた。

リストラ除隊後に民兵会社に入り、依然小競り合い状態が続いていた近隣諸国との戦闘に参加したり、教導隊の教官として隊員に対する教育・訓練をしていた。ＨＧの教育を受けた新兵達はＨＧの事を〝親父〟と呼んでいた。その一方、民兵会社の上層部からは得体のしれない人物として疎まれてしまった。

ＨＹは徴兵制度が廃止された年の翌々年、大学を卒業後、新卒採用で民兵会社に入社し、ＨＧの教育・訓練を受けた。ＴＴは別の民兵会社からＨＧの居た民兵会社に転職してきて、ＨＧの教育・訓練を受けていた。

ＨＧ「今朝の複数の爆発が爆弾テロと想定して…テロなら、民間人の安全確保のため軍や警察はどう行動すべきだろう」

ＴＴ「街から民間人を退避させますね、市街戦に持ち込むのであれば…なおさらだと思いますが」

ＨＹ「それが、街…いやＦ県領地から出さないようにしていますね…なぜ」

ＴＴ「街は至って平和そのもの…唯一、県領地外に行く交通機関を封鎖していますけど…」

ＨＹ「まるで、街全体を人質にしている…？」
ＨＧ「いや、街全体ではＦ県領地の半島全部かもしれん」
ＴＴ「そもそも、テロリストはどこに？」
ＨＧ「それだよ。俺が不審に思っているのは…テロリストが爆破したであろう場所はいずれもただのオフィス…何が目的だ？」
ＨＹ「ううーん、テロじゃなくてやくざの抗争と言うことでは？」
ＴＴ「あっ、それそれ！」
ＨＧ「それなら、交通機関閉鎖するかぁ？」
ＨＹ「そうですね…」
ＴＴ「なにか見落として…Ｆ県領地の人を県領地外に出さないで市民を囲っておく必要…それも正規陸軍が…って何？」
ＨＧ「例えば…未知のウィルスがＦ県領地内で発生し、それを広げないための防疫出動…とか」
ＨＹ「ええっ！私達感染者？」
ＴＴ「パニックを起こさないために情報統制しているってことですか？」
ＨＧ「それなら、合点がいく…と言いたいところだが、市街地の爆発はなんだ？」
ＴＴ「未知のウィルスの事を知って世の中に口外しようとした人かも…」
ＨＧ「爆破だぜ、爆破！それなら、まず捕まえるのがフツーだろ？」
ＴＴ「そうですね…フフッ。過激な考えになりました」
ＨＹ「すると、防疫出動の線はない…他には…」
ＨＧ「Ｆ県領地丸ごと人質ってぇのは？」
ＨＹ「准尉もＴＴに引きずられていますよ！そもそも、なんでそんなことするんですか？」
ＨＧ「外務大臣と大使の命とＦ県領地に居る人の命を含めて、なにかとてつもない要求を政

府にするのかと思って」
ＨＹ「誇大妄想もいい加減にしてください！！」
ＨＹの突っ込みに、
ＨＧ「まとまらんなぁ…」
ＴＴ「そうですね」
三人とも、発想のネタがなくなり、下を向いてしまった。

いくら話しても、話がまとまらずＨＧは「アイスブレーク」と言って議論を一旦止めた。
外を見ると日が陰ってきた。ＨＧはドライブインを出てすぐに大きな伸びをした。
ポケットからパイプを取り出すと、朝の一服後自然鎮火して火皿に残ったタバコに火をつけた。

そして、後から出てきたＴＴ、ＨＹに対して、
「さて、この後どうする？」
「どうするって、どうしましょう…Ｆ県領地から出られないことには…」
ＴＴが困り顔で言う。ＨＹも不安そうな目でＨＧを見つめる。
「俺に考えがある」
「なんですか？」
「どうやってもＦ県領地が出られないので、三人とも帰れない」
「「はい」」
「だったら、Ｆ県領地内で今晩の宿を探すしかないな」
「「ええ…」」
「この先に、確か温泉宿があるんだけど、そこに行かない？無論俺の驕りで」

「えっいいんですか？」

ＨＹが嬉しそうに言うと、ＨＧが大きく頷く。

「ただし…宿泊代浮かせるためにお前たちは俺の妹と言うことにしてくれ。そうすれば家族部屋が取れると思うがどうか？」

「あら、それだったら、私は准尉の奥さん。ＨＹは私たちの子供の方がいいのではなくて？」

とＴＴが言うと「さんせー、その方が自然」とＨＹも言う。

ＨＧは二人を交互に見て

「ＴＴが言うのなら、それでもいいけど、ＨＹ、お前俺と１４、５歳位しか歳違わんだろ…まっ、小柄で童顔だから子供と言っても通用するか…」

「あっ、なんか馬鹿にされている」

ＨＹは膨れた。

●話題緩急

作者注、ここで、ＨＧ達が居る世界とＦ県領地とは何かと解説しましょう。

まずは、世界自体の定義から…

冒頭にありますように「＝この物語は、今、私達が居る世界とは違う世界の話です。しかし、今流行りの〝異世界モノ〟とも違い、別の平行宇宙の世界の話です＝」とありますように、今私達が住んでいるこの宇宙とは別に極めて似たような宇宙がいくつも同時並行で存在していると言う話が理論物理学の世界に説があります。

まぁ詳しい話はネットで検索してください（丸投げ(笑)）。

なので、ここに居るＨＧ達を始めとする輩達の存在している世界は、いまこの話で私のたわごとを読んでくださる賢明な読者の皆さま方は、「やっぱり、異世界ものかよ！」と思うでしょうが、この世界では、魔法もドラゴンも魔王（近い人はいるかも…(笑)）出てきませ

ん…ゴメンナサイ！（その代わりに、近代兵器が出ます）

・天体自体の話

この天体では、今私達が住んでいる地球と呼ばれる天体と基本変わりません。

海と大陸地と島と極地が存在します…ただ、大陸地と島の形状…つまり地図が違います。

・国の話

ＨＧ達が居る場所は大陸に沿うように点在している島国です。〝皇国〟と呼ばれています。私達が住んでいる列島ではなく、大小点在する島々によって構成された国です。

一番大きな島に国の首都があり、〝帝都〟と呼ばれています。帝都には〝皇王〟と呼ばれる国の元首が居ます。政府は皇王の親政政治による政府機関が存在します。

海を隔てた場所に大陸があります。その大陸をいくつかに分割してそれぞれ国が存在しますし、また別の大陸国家や島嶼国家等が存在します。

・Ｆ県領地の話

国の行政機関の区分で、この日本で言う〝県〟に該当します。国自体が皇王の領地なので、区分けしてそれぞれ県領地知事が皇王の命で治めています。県領地知事は皇王自ら任命するので（日本みたいに選挙で選びません）、皇王に近い親族や皇王家に忠節のある貴族から任命され、任地を治めています。

県名はＡ～Ｚまでの１府と２５県存在します。名前は、皇王の居る帝都（これは特別行政区分なので、上記Ａ～Ｚまでの県領地とは別）の行政区分に割り振られています。

Ｆ県領地は、帝都のある島と別の島にあります。Ｆ県領地自体が大きな半島で、その根元はＳ県領地、また南側に内海と呼ばれる大きな湾を挟んでＯ県領地が存在します。

Ｆ県領地の北側は外海と呼ばれる海で隣の大陸にあるＣ国と向かい合っています。東側にＦ県領地とＯ県領地の間の内海と外海をつなぐＦ県領地半島の突端があり、西側は狭い幅でＳ県領地に接続しています。

Ｆ県領地北側の外海の海岸はその全体を断崖絶壁の海岸（イギリスのドーバー海峡断崖と東尋坊を想像してください…ちなみに、ＨＧ達の世界ではよくサスペンスドラマのロケで使用されている様です(笑)）Ｓ県領地との境目付近に砂浜のある海岸が存在しています。

ちょっと乱暴かもしれませんが、日本列島にある伊豆半島が南北を９０度反時計回りに回転し、西東にしたような形状を思い浮かべるといいかもしれませんね。

・組織等の話

政府：皇王親政の政府で成り立っています。

正規軍：政府の組織。陸海空のそれぞれがあり、正規陸軍、正規海軍、正規空軍等と呼ばれています。時の皇王の富国強兵の号令のもと、かつて徴兵制度がありました。その当時は皇国政府軍と呼ばれていました。２０年前に徴兵制度が廃止され、正規軍として改称しています。現在、正規軍に入隊するには志願制（但し、入隊は高い倍率。志願しても兵役に就けない確率が高い）

民兵会社：正規軍が先の大戦により、国際連盟（国連）主導の条約で軍縮になったため、皇国政府軍自体に大規模なリストラが発生しました。

それにより、軍人の失業者が多く巷に溢れました。

正規軍は国連の軍縮条約の基にリストラを行っていましたが、依然Ｃ国の反政府組織や他の近隣諸国との紛争は絶えず起こっていたため、政府は以前から存在していた民兵会社について、それまでの戦場での後方支援任務を戦闘行動にまで拡大する事を決定しました。国民皆兵制度下で兵役を終えた者は予備役になり、民間企業に再就職しますが、収入は低く

なり、暮らしが苦しくなる（正規軍の兵士の給料は高額で民間企業の従業員の平均給をはるかに上回っています）。

民兵会社自体は軍縮以前にも存在していましたが、軍縮により皇国政府軍をリストラされた者が新たに興した民兵会社が多くなり、競争社会になっている状態です。

また民兵会社には、ＨＧやＩＦみたいにリストラされた元皇国政府軍軍人が多く再就職をしています。

政府の軍縮後は徴兵制度による兵役義務がなくなり、民間企業に就職する新社会人が増えると考えられていましたが、民兵会社の給料は民間企業のそれを上回っているので、後方支援や後方軍事活動ならいいかと考える新社会人は已然多く、ＨＹはその先駆け。ＹＭやＴＴみたいにより高報酬を目指して、民兵会社を渡り歩いている者も居ます。

・世界観の話

先の大戦：元々大陸に存在する大型国家を治めるＣ国皇帝とその大陸に沿うように散らばっている大小の島嶼国家を収める皇国の皇王は仲がよく（遠い親戚）、両国間は友好関係を続けていたが、長年のＣ国政府の腐敗で、国内各地で反乱が起りました。

反乱を収束するため、Ｃ国政府の要請により、周辺各国が派兵を行う事になり、その中に、皇国政府の軍隊もありました。Ｃ国の北側に隣接するＮ国がＣ国国土に進出する野望を抱き、陰で反政府勢力に肩入れしたため、反乱は混乱状態になりました。それでも、一旦混乱が収束すると、皇国政府は「大陸に野望無し」と宣言し、軍を真っ先に引き上げました。それに続いて各国の派遣軍も引き上げ続ける中でもＮ国だけは最後まで居座り、再度反乱軍を焚き付けＣ国政府を倒す寸前まで追い詰めました。

Ｃ国の皇帝の再度の要請に皇国政府は直ちに派兵をおこなおうとしましたが、居座ったＮ国の国土は強大な上、海を隔てた本国とは違い陸続きなので、長く接する国境を超えて

次々とC国に兵力を増強し駐屯してしまいました。この兵力と反乱軍の両方を相手とすることは国力の差から無理と判断した皇王は、C国から逃れてくる人々を受け入れることで精いっぱいなりました。

その後、C国の反乱政府は皇帝政権を倒し、皇帝一族を単なる象徴として国をまとめ、勝利宣言を他国に宣言し、国として認めるよう国連に詰め寄りました。背後にはN国政府が強く関与していたので国連は仕方なくC国の反乱政府を新政府として承認しました。すると、N国政府はC国でN国の兵が駐屯している領土をN国に割譲するよう強要してきました。

C国の新政府は国連を動かしてN国に抗議し、他国にも協力を要請しましたが、他国が「勝手にしろ！」とばかりに助けを出すことがありませんでした。

唯一、海を隔てた皇国だけが隣国のC国に対し、皇国に逃れてきた皇帝政権の人達を受け入れる事を条件として、支援を提案しました。C国新政府は「折角追い出したものを…」と歯噛みしつつ、支援を受け入れました。皇国が再度派兵を行うと、今まで日和見を決めていたC国周辺国が一斉に支援を始めました。これにより、N国の兵力は自国領付近まで後退する事を余儀なくされました。またC国に帰還した皇国政府の人達は自ら先頭に立って戦ったので、C国国民に絶大な支持を得ました。そのためC国の新政府下で行われた選挙では皇国政府軍の人達の候補者が多く当選し、C国政権議会の与党になり、政権を取り戻しました。そのこともあり、C国新政権と皇国は友好条約を結び、国連配下の軍縮条約に基づき、今まで膨大な国家予算をつぎ込んで維持し続けてきた皇国政府軍（正規軍）の軍縮を行いました。

・個人名の話

この星の人達にも個人を特定するための姓と名が存在します。

ただ、作者が個人名を考えるがめんどうくさいので（一部ＩＦみたいに名前が特定できる人もいますが…(笑)、イニシャルにしています。ただそんだけ！

●温泉宿で再度情報収集と作戦会議。

温泉宿の部屋に入ったＨＧ一行、三人の内、ＴＴとＨＹは温泉に入る支度を始めたが、ＨＧは市街地で購入した小型ドローンとヘッドマウントディスプレイのセッティングを始めた。それを見てＴＴは、

「折角、温泉宿に来たのですから、そんなことしてないで、温泉入りましょうよ」

とＨＧに言った。それを聞いて、ＨＧは

「温泉より、こっちのセッティングの方が優先」

と答えた。

「そんなおもちゃ何に使うのですか？沢山買い込んで？」

ＨＹは軽バンに積み込んだ時の事を思い出して言った。

「何に使うかって…そりゃ、お前らの入浴シーンを覗き見…イテっ」

ＨＧがシレっと言った瞬間、ＨＧの顔に座布団が当たった。投げたのはＨＹである。

「このスケベ親父！」

ＨＹが舌を出して威嚇する。

「テテ…それは冗談だが…」

ＨＧは飛んできた座布団を放り出し言うと

「あらー、冗談だったのぉ？別に私はいいけど…」

ＴＴがわざとらしく言った。

「あのなぁ！ＴＴ。お前さんは人妻だろうが！俺はあんたの亭主ともめたくない」

「はいはい…で理由はなぜですか？」

ＴＴは、真顔に戻るとＨＧに訊ねた。

「偵察用だ。いつ必要になるかもしれない」

ＨＧの言葉に、今は非常事態下である事を思い出し、温泉に入る支度の手を止めて
「そうでしたか…手伝います」
「わたしも！」
三人は手分けして小型ドローンとヘッドマウントディスプレイのセッティングを始めた。
セッティングの終わった小型ドローンとヘッドマウントディスプレイをＨＧのスマートフォンに無線接続した。
ＨＧは、早速小型ドローンを飛ばして、
「ハハハ、世の中便利になったものだ…こんなおもちゃが自分の目になって飛んでいるのは…それに、意外と静かだな」
と子供の様にはしゃいでいると壁に小型ドローンが向かっていきヘッドマウントディスプレイをしているＨＧの目には、どんどん近づく壁がアップになって迫ってきた。
「わっ！」
と驚いた声を上げたが、小型ドローンはなすすべなく壁にぶつかった。その光景を見ていたＴＴとＨＹはクスクスと笑った。
「あーーー、びっくりした！」
ヘッドマウントディスプレイを外して、ＨＧがため息をつく。
「こりゃ両方なれるのには時間がかかるな」
残りの小型ドローンもセッティングを済ませ、ＨＧは
「やな汗かいた…さて、温泉に浸かりにいくかね」
「はい…でも、ドローンは持って行かないでくださいね！」
とＨＹに釘を刺された。

●その頃のＩＦ達

ＨＧ達三人が温泉宿に向かっているのと同じ頃、ＩＦはまず自分と部下達の安全を確保する事を優先にすることにした。

地図を見ながら幹線道路を避けて東を目指して進んでいた。その途中で内海の小さな漁港にたどり着き、燃料や食料を補給している間、地図を見ながらＩＦが唸っていた。

「隊長、この後は」

運転席に座る部下が訊ねる。ＩＦは海を挟んで見える対岸のＯ県領地を見ながら、

「どうするかねー、ここから船に乗って向こうに逃げ出したいとも思うけど…本部の命令は絶対だし…」

空港から退避している最中に、帝都の本部に連絡をとろうとしたが通じなかった。また、不思議な事にＹＭが隣のＳ県領地に居る家族に連絡を取ろうとしても、電話が繋がらなかった…

「ＩＦ隊長、一旦逃げるのも手では？」

ＹＭが恐る恐る進言する。ＹＭの言う事も分からないではないが、こうも情報不足では…

『現地で爆発がありました。訳が分かりません。なので、逃げました』…では、本部は許さないでしょう…」

それを聞いて、ＹＭはシュンとして項垂れた。やがて漁港の漁協組合に行かせた部下が戻ってくる。

「報告します。漁協の人達に話を聞いたのですが、市街地の爆発はガス爆発とニュースで報じられているそうです」

「…ガス爆発ねぇ…同時に４か所も…それはおかしい。他には」

「特に、これと言ったことは…」

ＩＦは独り考え込んでいた。トラックのラジオでも、同じく市街地のガス爆発を報じてい

た。一方、外務大臣とＣ国の大使については、なにも報じられていない。それがＩＦにはなにか引っかかっていた。本来なら、ガス爆発より、外務大臣とＣ国の大使が朝からの会談の後で、高級ホテルで行われた記者会見の内容の方が全国ネットの報道で関心がある事なのに、それが全然報じられていない。

また地元正規陸軍の通信を通信機で傍受しているが、普段使う周波数帯に普段使用する暗号化された通信とは全く異なる謎の通信が交わされていて、何を話しているか分からなかった。いっそ地元の正規陸軍に通信機で呼びかけようかと考えたりもしたが、長年のカンがそれを押しとどめていた。

ＩＦは、「(完全に周りから置いて行かれている…)」と考えた。情報の孤立という事がＩＦを益々苛立たせていた…ここが、周りの意見を遠慮なく取り入れるＨＧとＩＦの違い…ＩＦもＨＧと同じく教育者ではあるが、ＩＦはある程度自分の考えがまとまってから、部下に意見を求め、自分の考えが間近っていないことを確認する方法で部下に指導・教育をしていた。

独り悩んだ結果、ＩＦは「(逃げるにせよ隠れるにせよまずは身軽になろう)」と考え、地元の漁民を買収して、対岸のＯ県領地に渡ったと見せかける囮作戦をする事にした。

ＴＹとＩＹ、二人の部下にここから重い銃火器類や予備の装備と共に、Ｏ県領地に渡るよう命令。積み込んだ装備は途中で海に投棄するよう指示。それから、対岸で本部と連絡を取り、指示を受けこちらに転送するようにと命令した。また、本部から部隊の居場所を聞かれたら、ＩＦは地図の山間部の１点を指して、「ここに居る」と伝えた。

そして自分達は様子見のためトラックで山間部に向かった。

●作戦会議ぱあっと２

夕食後のＨＧ、ＴＴ、ＩＹの三人。お酒もろくに飲まずにテーブルの上に地図を広げてドライブインでの議論の続きを始めた。

ＨＧ「…もしかすると、もっと大きな仕掛けがあるのでは…」

ＴＴ「仕掛け？」

ＨＧ「この半島全体を占領する事で得られる何か」

ＨＹ「これでは？」

ＨＹが示した地図の一点に「核施設」と書いてあった。

ＨＧ「うーん、原発かぁ…確かに破壊すれば、風向きによっては、半島はおろか対岸に被害が出るし、内湾は使い物にならなくなるけど…それだけだしなぁ」

ＨＧ「この半島に、立地上の利点…原発以外に例えば、戦略的魅力とか、資源とかあるか？」

ＴＴ「立地上の利点と言えば、Ｃ国に近いくらい？」

ＨＧ「内湾の軍港を閉塞するにはいいが、それだけだな。Ｃ国に面している軍港は他の県領地にもあるし、今の時代は航空兵力もあるしね」

ＨＹ「あっ！そういえば…、この核施設って、確か核燃料再処理施設と高速増殖炉が併設されていませんでしたっけ？」

ＨＧ「それだ！」

ＨＧは膝を叩いた。

ＨＧ「あいつらの切り札はプルトニュウムだ！」

ＨＧ「プルトニュウムを運び出し、半島のどこかに隠して『放射能をばらまく！』と脅せばいいのか」

ＴＴ「どうやって？」

ＨＧ「それは…うーん…でも、核燃料再処理施設のＭＯＸ燃料なら、移動可能だろう…それ専用の車両があるから。半島のどこかに置いて、遠隔操作で破壊すれば〝放射能をまき散ら

す、汚い核爆弾〃の出来上がり」

ＨＹ「それって、軍の監視衛星でも使えばすぐにばれるのでは？」

ＨＧ「位置が分かっても、テロリストに破壊されたら元も子もなくなる」

ＨＹ「なるほどー」

ＨＧ「でも、それはあくまで切り札…それをちらつかせて何か〃利〃になることはないか？」

ＴＴ「その〃汚い核爆弾〃ちらつかせて、半島の農畜産物や近海の海産物にダメージとか悪い噂になる事なら、想像できますが…」

ＨＧ「それは〃利〃にならないなぁ」

ＴＴ「ですよねー」

ＨＹ「でも逆に、その爆弾をネタに正規軍や警察を脅かしてＦ県領地を人質に取っていると言うのは」

ＨＧ「…ありかも…警察がテロに加担しているとなると、厄介だな」

ＨＹ「どうしてですか？」

ＨＧ「軍より警察がシビリアン・コントロールに長けている。例えば、街角の監視カメラ…その気になればコンビニ等の企業や民家が独自に設置しているカメラや車に着いているドライブレコーダー等の画像が入手できる。それに最近警察ではＡＩを使用して不審人物をカメラの画像から瞬時に探し出すソフトを使っている。それから、道。特に主要幹線道路は車のナンバー読み取り装置があり、手配車両のナンバーを登録すれば瞬時に走行している位置を想定できる。またこのスマートフォン…いまや、皇国民一人に一つは必ずと言っていい程持っている。それに最近の携帯端末は便利でね…通話やメールだけではなく、こいつ一つでクレジット決済や身分証明証の代わりをする。また、位置情報衛星を使えば、ほぼ正確に現在位置を把握できるし、携帯端末基地局を複数使用すれば、このスマートフォンの位置が特定できる。それら位置情報は逐一電話会社に送られていて、そこから各社電話事業者は

政府の要請により、位置情報データーを提供する義務が課せられていて、最近では、政府は多発する災害や戦争・テロ・犯罪のために国民の位置情報をご丁寧に把握できる様になっている」

ＨＹ「と、言うことは、電話会社からデーターを貰えば、この半島にどのくらいの人が居て、どのように行動しているのかを把握できるということですか？」

ＨＧ「山間部や海岸沿いの辺鄙なところに居る人達は通信圏外で把握しづらいと思うけどね」

ＨＹ「じゃ、今すぐ携帯端末のスイッチを切らないと！」

ＨＧ「それは、ダメだね。今切ったら逆に不審がられる」

ＨＹ「では、どうすれば」

ＨＧ「携帯端末の圏外に行けばいいのだが…例えばもっと山の奥とか辺鄙なところ。地勢図見て見るか」

ＴＴ「だから、少ない人数でこの半島全体の人を把握できると」

ＨＧ「そう、だから、隔離する必要がない」

ＴＴ「そんな大雑把でいいのでしょうか？」

ＨＧ「正確に把握する必要がないんじゃないかぁ…大体の群衆の動きを把握して、不審な動きがあればそこに兵力を集中して制圧すればいいのだから…」

「ＨＹ」

「はい」

「お前、試しに家に電話してみろ」

「えー、なんでですか？」

ＨＹはあからさまに家に電話するのを嫌がった。

「もしかすると、ここ（F県領地）から外部への通話とかの情報も封鎖している可能性がある」

「ほんとですか？准尉」

ＴＴが心配顔をしてＨＧに訊ねる。

「このF県領地全体を人質に取るためには、人の隔離・管理が一番だが、それは閉鎖された空間にしないと効果がない…例えば、一人の人間を拉致したとしよう…その人間が逃げられない様にするのと、その人間を奪還しようとする人達に対して、拉致した犯人はどうすればいい？」

「まず…拉致した人が管理外に出られない様にするのと、外部に連絡できない様にする事ですね…奪還をしようとする人に対しては、拉致した人がどこにいるか分からない様にする事と拉致した人が奪還する人の元に帰れなくする事ですね」

「それを、F県領地全体の領民にした場合は？」

「まず、F県領地の外に逃げられなくする事ですね…次に情報の統制…でも、そんな事今の情報社会では無理なのでは？」

「そう、大昔の事じゃあるまいに…こんなことやっても、情報は外に洩れるし、また入ってくる。問題は情報を如何に管理して今迄通りの生活に違和感を持たせないかを考えないと…」

「分かりました。家に電話してみます」

ＨＹはスマートフォンを取り出し、恐る恐る家に電話をした。

『この回線は現在大変込み合っております…しばらく時間を置いた後に再度かけ直して下さい』とのアナウンスが流れた後、通話が切れた。それを聞いて、ＨＹは安堵の表情をしたが、ＨＧとＴＴはそれに気づかなかった。

「…やはりな…奴ら電話局を抑えたか」

「では、ＳＮＳとかは？」
ＨＹが言うと
「今度は私がやってみます」
ＴＴがスマートフォンで既に実家に居る姉達にＳＮＳを使用して会話を試みる…するとＳＮＳ自体にログインが出来なかった。
「えっ？嘘！」
「…これで、大きな情報の外部漏洩と流入は無くなったな！」
「孤立しましたね」
「半島（Ｆ県領地）ごと陸の孤島ねぇ…」

●月夜の晩

その晩、ＨＧは旅館の窓際のテーブルに座り、ラジオを聞きながら盛んに手帳にメモをとっていた。
窓から差し込む月明かりが眩しく、ライトをつけなくとも手元が明るかった。
「眠れないのですか？」
ふいにＴＴの声が聞こえたので、声の方を見ると、ＴＴが布団から半起きになって心配そうにＨＧを見つめていた。月明かりに少しはだけた浴衣から白い胸の谷間が見える。
「…ああ、すまない。月明かりがまぶしくて起こしてしまったか」
「いえ…なにか熱心にやっているそうですが、何を？」
ＴＴの質問に、ＨＧは
「いや…夜這いの作戦を…」
「まぁ…」
ＨＧの冗談と分かりつつも、ＴＴは嬉しそうに答えた。

「この、スケベ親父！！」
ＴＴの向こう側に寝ているはずのＨＹの声が聞こえた。ＨＹもＴＴ同様、ＨＧのしている事が気になっていたようだ。
「オイオイ…ここでＴＴと不倫したら、ＴＴの亭主に申し訳が立たんだろ！」
ＨＧは真顔で答えた。それを聞いて、ＴＴとＨＹは、吹き出してしまった。
「わかってますよう…まったく…」
ＨＹが笑いながら言った。ＨＹも、ＨＧが昼間同様冗談を言っているのが分かっていたのである。
「…うっうん…さて、冗談はさておき…」
咳払いして、言うＨＧに
「あらぁ…冗談だったのですか、おとうさん」
ＴＴがわざとらしく茶化す。ＨＧは少し驚きながらも、
「ＨＹ」
「はい」
「お前さんは、大学の工学部…確か通信工学科の出だよな」
「…よく、覚えていましたね」
「そりゃ、あの民兵会社に大学の理系出身者が入隊するのは珍しいからな。俺は、今ラジオを聞いている…なぜかわかるか？」
と質問した。ＨＧがそういう質問をするときには、ＨＧの〝親父モード〟が出た時である。
ＨＹは昼間に続きＨＧの親父モードに戸惑いつつも、
「えーと、今の時間帯は…確か、電離層の性質が異なって、昼間聞けなかった遠方の電波が届くからだったと思いますが…だから、日中聞き取れない帝都からの放送が聞けるからですか？」

「よくできました」
「へへへ」
ＨＧが嬉しそうに褒めると、ＨＹは喜んだ。
「そう、帝都からなにか発信されていないかと思って探っていた…でも」
「でも？」
「それだけじゃぁないんだなぁ…あと、もう一つ」
「…それだけじゃない？」
ＨＹもＴＴも、首を傾げた。
「ＨＹには、新兵教育の時に話をしたことがあったんだがねぇ…お前（ＨＹ）の後（に入隊した新兵）にはこの話はしなかった」
「…降参です。なんですか？」
「それはねぇ…ノイズを聞いていたんだ」
「…ノイズ」
「そう、電子機器から発信されるノイズをね…今の時間とこの山奥のロケーション、付近に不要なノイズが少ないから、ラジオから聞こえるノイズの周波数をメモしていたんだ」
「…アッ！」
ＨＹは分かったようだ。ＴＴは分からず、
「…それが、なにか？」
とＨＧに訊ねた。
「電子機器には、輻射ノイズと言ってね、様々な機器から色々な電波が発信されるんだ。本来、無線ＬＡＮとかの無線ルーターに接続するための必要な電波ならいいのだけど、それ以外に不要な電波が出ている。本来、それらは外に漏れない様にしなければ、近くにいる他の機器に悪影響を与えるんだ。それが万が一医療機器やロボット機器などに影響を及ぼして、

誤作動すると大変なことになる。今の深夜の時間帯とこの山奥のロケーション…周囲に機器が少ないから、周囲の輻射ノイズが少ない。逆にノイズが聞こえる周波数をメモして昼間この周波数以外のノイズが近くにあれば、そこに輻射ノイズ元がある事になる。そうすると…？」

「機器を使っている…なにかが近くに居る可能性がある？」

ＨＹは即答する。

「本当は、スペクトラムアナライザ等の電波計測器があればいいのだけれど…」

とＨＧはため息をつきながら言った。

「…それで、帝都からは？」

ＴＴが訊ねた。

「Ｆ県領地で、なにか事件があったことは報じているのだが…それ以上の情報がない。外務大臣とＣ国の大使の事とか、高級ホテルで行われたはずの記者会見の内容とか、またはテロの話とか一切ない」

とＨＧが言うと、

「外交問題なので、隠しているのでは？」

とＴＴが応じた。それを聞いたＨＹは

「それなら、隣の県領地からの情報とかは？」

とＨＧに訊ねるが、ＨＧは首を横に振りながら、

「帝都からの情報だけだねぇ…Ｆ県領地との境に特派員が行っているみたいだけど、Ｆ県領地の境界から先に入れない事だけで、地元民の声がないね」

「Ｃ国の放送ではどうでしょう…この標高なら、Ｃ国の放送が入ってきますよね？」

とＨＹが言うと、

「それなんだが…C国の皇国向けの短波では、まだなにも…C国の国内向け放送ではC国語なので何言っているのか全然わからん！」
と言ってＨＧが苦笑いすると
「そうですね」
と言って、ＴＴもつられた。
「さてさて、二人とも俺がやっている事が分かったら、とっと寝てくれ…明日は朝から小型ドローンの操縦訓練だ…もし、眠れないのなら、こいつでもやるか？」
と言ってＨＧはテーブル上のスキットルを持ち上げた。
「准尉、飲んでいたんですか」
「…ちびりちびりとね」
「中身は何ですか？」
小柄の体に似合わず酒好きで大酒のみのＨＹが聞いた。
「ブランデーだ…上物だよ」
とＨＧは自慢げに言った。それを聞いてＨＹは
「一口下さい！」
「いいぞ」
ＨＧはスキットルをＨＹに放り投げる。それをキャッチしＨＹはすぐにスキットルの蓋を外して、中の匂いを嗅いでから、口元に持っていこうとした時ＨＧは
「俺と間接キスになるけどね…」
とシレっと言ったが、ＨＹはなんのためらいもなく一口含んだ。
「うわー、美味しい！」
至福の表情をするＨＹ。それを見て思わずＴＴも
「私にも飲ませて」

と言って、ＨＹから渡されたＨＧのスキットルを口にする。そして、
「ホント、美味しい！」
と嬉しそうに言った。そして
「まるで義兄弟の杯ね」
と言った。

翌日、旅館のフロントにあるテレビで、地元テレビ放送局の番組を視ると、全国ネットの朝のニュース番組はなぜか地元スポーツの録画番組に置き換えられていた。フロントのマガジンラックには地元新聞は入っていたが、全国紙は事件後入っていなかった。そのことからＨＧ達は報道関係が何者かに抑えられたと知る。

テレビのニュースではしきりに、Ｆ県領地と隣のＳ県領地との間の通信ケーブルが火災で燃えたとのニュースを大々的に報じていた。それを見ながらＨＧは
「…昨日の電話が不通になった理由はこれか…本当に燃やしたのか、それともフェイクニュースなのか…いずれにせよ、外部との連絡手段を断った事を宣言したか」
「完全に遮断されましたね…」
ＴＴが言うと、ＨＧは
『『完全に』と言う事は無理だよ…まだ衛星通信だってあるし、内海を通っているＯ県領地間の海底ケーブルだってあるだろうし、民間の人が趣味でやっている長距離無線だってあるし…この火災に注意を引き付けて外部と連絡が取れない事を県領民に教えてコントロールしているのさ。それに県領民を人質に取っている方だって通信は必要な物だから、全部潰せない」

●なんでここに？

午前中ＨＧ達は旅館の一室でドローンの操縦訓練をしてから、温泉宿を後にした。
半島脱出のために敢えて街道を避けて、ＨＧの運転で市街地の北側を迂回しようと山間部の裏道を車で移動している最中に、道の前に倒木があり、ＨＧは急ブレーキを踏んだ。
「おいおい、こんなところに倒木かよ！」
と言いながら、ＨＧが車を降りて倒木を調べていると、ＨＧは険しい目つきになり、そっと後ろ足で車の方に向かい出した。
車に近寄り、助手席の窓から顔を出しているＨＹに
「…そのまま、運転席に座れ。俺が合図したら、バックで後退しろ！！」
ＨＹはＨＧの様子に、何かあると思い、助手席から運転席に移動した。
ＨＧは背広の懐にある拳銃を握り、そのまま車を背にして辺りを警戒した。そこには機転を効かせたＴＴが軽ワゴン車側面のスライドドアを少し開けて待機していた。
ＨＧの正面の物音に反応して、拳銃を構え、
「誰だ！」
と大声で威嚇した。すると、ＨＧの前に一人の兵士が自動小銃を構えて藪の中から出てきた。ＨＧは兵士の姿を見て「(正規陸軍の兵士か…見つかったか！)」と思った。対峙するＨＧと兵士…すると、いきなり軽ワゴン車のスライドドアが開き、ＴＴがＨＧの拳銃の持った腕を引っ張った。
「オイ！」
と怒鳴るＨＧにＴＴは
「…囲まれています。逃げられません！ここは一旦降伏しましょう…」
と言った。ＨＧが辺りを見回すと、軽ワゴン車の周りは複数の兵士に囲まれていた。
ＨＧは拳銃を軽ワゴン車の屋根に静かに置くと兵士に背を向け、手を挙げた。ＨＹ、ＴＴは車から出てきてやはり手を挙げた。

兵士の一人は横からＨＧの顔を見て
「あっ…」
と言った。他の数人の兵士もＨＧの顔を見て
「…じゅっ、准尉だ」
と言った。そして、深くかぶっていたヘルメットの庇を持ち上げる。それを見てＨＧも
「あれ？お前確かＩＦの部下のＹＡだよな？」
「はいそうです。やはり准尉でしたか…でもなんでここに？」
落ち着いてよく見ると、兵士の戦闘服はかつて見慣れた民兵会社の物…木陰の薄暗がりのせいで、戦闘服の肩の部分の色が正規陸軍の物と異なるのが判別できなかった。また、腕の識別証が故意に外されていた。
『なんで？』それは、こっちのセリフだ。状況を報告しろ！」
ここに居る兵士…いや民兵会社の隊員はＨＧが新兵時代から鍛えた教え子達であり、今はＩＦの部下になっているが、かつての教官の命令には逆らえず。
「我々は、本部からこのＦ県領地に行き、ＩＦ隊長の指揮で現地支部の隊員と共に昨日から当地に来ている外務大臣とＣ国の大使の警護任務に就くために来ました」
「えっ？今『ＩＦ』と言ったな！」
「はい」
「あれもこっちに来ているのか…」
ＨＧはげんなりした顔で言った。
「それで、今なにをしている」
「はっ、ＩＦ隊長の命令で、当地において待機しています。その間我が隊が見つかるのを恐れ、この道を封鎖し見張っていたところ、准尉に見つかってしまいました」（オイオイ逆だろ！作者(笑)）

「そうか…でＩＦは、どこに？」
「この先で野営しています」
「案内せぇ！」
「はい」
ＨＧはかつての教え子達についていき、その先で地図を広げて話をしているＩＦとＹＭの姿を見つけた。一方ＩＦとＹＭは、スーツに鼻髭の男を確認し、
「あんた！」「先輩！」
三者三様の驚きであったが、次に出た言葉は三人同時に
「「なんで、こんな所に居るの？」」」
と言った。三人とも同時にハモったので、お互い苦笑し次の言葉を出すタイミングをそれぞれ伺い、三竦みの状態になってしまった。

見かねてＨＧが口火を切った。
「まぁ、こんなところで黙り込んでいては時間の無駄だから、俺から話すわ。俺は会社を退職した後、昔通っていた大学がここにあるので、母校とか昔居た下宿があった場所とか思い出のある街並みを見に旅行に来た。ついでに大学の後輩であるＹＭに会いに…最も変なところで再会したが…泊まったホテルでＴＴと再会し、市街地の爆発のごたごたの中でＨＹと再会して、市街地を脱出して今に至る」
…ここに居る人達は、ＨＧ・ＴＴ・ＨＹがかつて所属し、ＩＦやＹＭとその部下達が今も所属している民兵会社ＤＫの社員達なので、『会社』の一言で通用する。
「あっ、先輩そうでしたか…私も会いたかったです」
その会話を聞いて、ＩＦは「（あの二人ってそういう関係…）」と驚いた。

ＹＭが、
「では、次に私が話しますね。私は、一昨日からこちらに来ている外務大臣とＣ国の大使一行を警護する任務を受けて市役所で打ち合わせしてから、本部から応援が来ると言うので、支部の部下全員で空港に迎えに行き、合流した時に、市街地で爆発騒ぎがあり、ＩＦ隊長の指揮の元、ここまで来て情報収集をしていました」
「あたしは、今ＹＭが言った通り、本部からの命令でＹＭに応援するため来ました。後は同じく」
と、ＩＦが言い終わると、ＨＧは皆不慮の事態でここに来たことを認識した。

●狼と狸

「それじゃ、俺達はおいとまする。ここにお前たちが居るのは黙っていてやる」
ＨＧが言って振り向き、右手を挙げてヒラヒラと振ってＨＹの軽ワゴンに向かって歩き出そうとすると、ＩＦが慌てて
「ＨＧ手伝え！」
「なんでだよ！」
ＨＧはＩＦの言葉に歩みを止めたが、振り向かずに言った。
「元同僚が困っているのに、助けないのかよ！」
ＩＦの言葉にＨＧは振り返って、両手を広げて
「お前らは本部の指令でここにいるのだろ？俺達は民間人だ」
と言って、ＨＧはソッポを向いた。ＩＦがＨＧの態度にカチンときて、
「そもそも、ＨＧ！あんたねぇ！」
ＩＦがＨＧに詰め寄る。ＨＧもＩＦに負けじと詰め寄った。周りから見て二人はキスでもするかのように顔を近づけ、互いの唇ではなく、額を擦り合わせるようにして、

「何だよ！」

「仕事でも、飲み会でも私が誘うと三回に一回位は難癖付けて逃げるわよね。それから、三回に一回は私に出させるわね！まったく、一人で洞ヶ峠を決め込んでさ、ついでに私の悪口を行ったりしてさ、チャンスと見ると横からしゃしゃり出きて美味しいとこ持ってて…あの時だって、貴重なシングルバレルのバーボンウイスキー、プレゼントにくれるって言ったから期待したのに、持ってきた瓶の2分の3しか入ってなかったし、また別の時には、私が風邪ひいて寝込んでいたのに見舞いと称して外に連れ出して、チェーン店で牛丼食べさせたわね」

「はぁ？なに、昔の話を蒸し返しているんだよ！今それを言う？悪口は言ってない！呑兵衛と言っているだけだ。それに、三回に二回は俺が出しているじゃんかよ！」

「大事なことでしょ！…ほんっとぉに、せこいんだから！」

と二人でいがみ合っているのを見て、二人の関係を知るＨＹは「(それが別れた理由なんじゃないの？)」と思った。

「お二人とも仲が良いのですね」

ＹＭが笑って言うと。

「「どこが！！」」

とＨＧとＩＦはＹＭに向かって同時に言った。

ＹＭの横槍で、興が覚めた二人。

「あーっ、俺の一存では決められないね。ＴＴ、ＨＹどうする？」

とＨＧは、後ろに居たＴＴとＨＹに言う。ＨＧとしては今更二人に危険な目に遭わせたくないと考え、ここで二人が躊躇する様子が見られれば、ＩＦに難癖付けて二人を解放するつもりであった。そんなＨＧの考えが分からず

「私も准尉とご一緒します」「はい、准尉に従います」
とあっさり、現地徴用に同意した。
「あーっ、めんどくせーー」
とＨＧが言った。ＨＧがこの「めんどくせーー」…それは自棄になって言ったのではなく、大抵現在の問題について解決策が用意されている。それを知っているＩＦ、ＴＴ、ＨＹは
「「(でた！)」」と思った。

「…ところでＦ子ちゃん」
『Ｆ子ちゃん』と言うなと、言ってるでしょ！…でなに？」
「俺とＴＴ、ＨＹの立場と、指揮権の確認したいのだけど」
「うーん、そうねぇ…あんた（ＨＧ）は会社では尉官待遇だし、後の２人は下士官待遇だったし、私もＹＭも下士官待遇だし…」

説明しよう！（作者）…この〝下士官待遇〟とは正規軍と連携して行動する時に名乗る階級の事である。そもそも、民兵会社では、軍隊とは違い、階級の概念はなくＩＦやＹＭは過去の経験から部隊のリーダーとして隊員を率いる権限が一時的に与えられているのである。ＨＧの〝准尉〟は正規軍と行動する際に名乗る便宜上の階級である。また、それがＨＧの渾名にもなっている。ＨＧの皇国政府軍除隊時の階級は〝上級曹長〟。軍隊では、本来士官学校に行かなければ、尉官に昇格できない。
　ただ、ＨＧは単独で正規軍と作戦行動をしたり、帝都にある軍令部や参謀本部をはじめ、官公庁に出入りする機会が多いので、便宜上〝准尉〟と名乗ることを民兵会社が許可している。それがＨＧの民兵会社内の通り名にもなっている。ちなみにＩＦは皇国政府軍除隊時の階級は〝曹長〟、ＹＭの除隊時の階級は〝軍曹〟である。共に正規軍と作戦する場合は、

〝曹長待遇〟。ＨＹに至っては、徴兵制度が廃止された後なので、元々階級がない。最終的に一部隊を率いた立場まで出世したので、正規軍と行動する時は〝曹長待遇〟である…ちなみにＴＴは皇国政府軍除隊時の階級は〝上等兵〟で民兵会社時代は〝上等兵〟で結婚退職。

民兵会社の社員は、正規軍の指揮下で行動するので、正規軍側の指揮は中尉、少尉の尉官が執る。そのため、指揮系統の混乱を避けるために、実行部隊のリーダーは、特異な場合（ＨＧとか特殊技能を持つ者や、一支部をマネジメントする者）を除いて尉官クラス待遇にはならない。

しばし考え込んだＩＦは、この際ＨＧを指揮官にして、何かあったら肩代わりさせることを思いつき

「ＨＧ、あんたに全指揮権を預けます」

それを聞いたＨＧ、ＩＦの意図が見え見えなのに、

「わーった（判った）…隊長は俺ね！いいね？ＹＭ、ＨＹ…それとＦ子ちゃん」

と、無条件で隊長になることを引き受けた。ＹＭとＨＹは無言で頷く。

「Ｆ子ちゃんと言うなと何度も言ってるでしょ！」

「はい、Ｆ子ちゃぁん…もう俺が隊長なんだからぁー、隊長が隊員をどう呼ぼうが勝手でしょ！」

「ぐぬぬ！」

ＩＦは「（こいつに指揮権委ねるの間違ったかも…）」と思い、歯噛みして悔しがる。

「さぁてと、まずはどうするか…」

とＨＧは腕組みして考え込む。そして、周りを見回して

「もう一度、市街地に偵察に行ってくる。Ｆ子ちゃん、ＹＭを借りたいのだが…」
「いいでしょ、ＹＭお願いできる？」
自棄になったＩＦは「もうしらん！」とばかりに、ＹＭに振った。
「はい」
ＩＦから振られたＹＭは「（やったー！ストレス源のＩＦ隊長と別れて、ＨＧ先輩とお出かけできる）」と喜びたいのを抑えて返事した。

●なんでＩＹが？
その時、
「ＩＦ隊長！」
「なによ？」
まだ怒りが収まらないＩＦに対して、道を見張っている隊員が二人の隊員を連れてきた。
「ＴＹとＩＹが戻りました」
「なんだってー！」
対岸に行って、本部と連絡を取るよう命令したＴＹ，ＩＹが戻ってきたのにＩＦは驚いた。
また、ＨＧは本来本部に居て、ＩＦの部隊にいないはずのＩＹを見かけて驚く。

ＴＹとＩＹはＩＦの所に行き、敬礼すると、
「報告します。対岸のＯ県領地に行き、本部と連絡を取ることに成功しました。それで、本部の指示は、『部隊に戻って指示を受ける様に』と命令されました」
その報告に、ＩＦは憤慨して
「あんたたち、帰ったら軍法会議！あっちへ行け！！」
と叫んだ。

ＴＹとＩＹがシュンとして、ＩＦの居る場所から去っていく姿を目で追いながらＨＧはＩＦに耳打ちする。

「ＩＹ…あいつは、左耳が難聴だぞ」

「えっ？」

ＩＦは驚いた。

「知らなかったのか？」

「ええ…」

ＨＧは、ＩＹの教育をしていた頃、彼女が手を左耳に当てている仕草…さりげなく左手で左耳付近の髪の毛を掻き揚げている様な仕草だが、重要な話をするときに必ずするので、不審に思い、彼女が廊下を歩いているときに彼女の左側によけて、わざと小声で卑猥な言葉をかけた。その時のＩＹの反応が全くなかったことに確信を持ち、後日廊下を歩いているＩＹを手招きして呼んで、ラウンジで雑談がてら「お前、左耳が聞こえ辛いんじゃないの？」とズバリ聞いた。

それを聞いたＩＹ、顔を曇らし、

「なっ…なんでわかったのですか？」

「ああ、営業のＳ女史がお前と似た仕草をするから…あの人、過去に前線ですぐ近くに爆風を浴びて鼓膜をやられてから、聞こえづらくなっているのでね…それで営業に回された」

「…そうですか」

「よく、この会社に入社できたな」

「正規軍は、入隊前に兵役検査があって、聴覚試験で私は落とされるでしょう…ここ（民兵会社）は、入社前の健康診断は自己申告ですし、もっとも入社後の健康診断でバレましたが…社長の計らいで、入社できました」

ＨＧは最近の政府が民兵会社や民間企業に対して身体障害者の一定数雇用を強要しているのを思い出した。企業人員の一定割合の障害者を雇用すれば、罰金は払わなくて済む。ＨＧはそれらの書類を作成して政府機関に申請しているので、制度を理解していた。しかし、ＨＧの作成したリストにはＩＹの名前がないことも知っている。何かある…とＨＧは思ったが、ハタと政府は近く制度の改正をして、先程の一定割合の人数を上回った場合、補助金を出す予定になる事を思い出した。ＨＧは「そっちか！」と思った。

「このことは、社長から口外しないよう言われています。だから教官、黙っていてくれますか？」

「…分かった」

多分、ＩＹの難聴の件は社長の他あの日和見保身内密主義の上層部も知っている事であろう…知っていて敢えてＨＧに知らせないのだろう…そんなＩＹとのやり取りをＨＧは記憶していた。

「まぁ、俺もＩＹ本人から口止めされているからなぁ…だから後方支援のＳＳの元に配属されているんだぞ。知らなかったのなら、今はＩＹの指揮官であるお前さんに話とく」

「そうなの？彼女は、今回の作戦に自ら志願して来たの…だから、今の状況下で対岸（Ｏ県領地）に行かせたけど…」

「何？」

なんでわざわざ、こんな前線に志願して来たのか、ＨＧとＩＦはＩＹの意図が読めなかった。日和見保身内密主義の上層部と同体のＳＳがＩＦの監視役として送り込んだのかもしれないと二人は話していた。

●ＩＦとＨＧ

ＨＧはＹＭ、ＴＴ、ＨＹを連れてＨＹの軽ワゴン車でＦ県領地の市街地に向った。途中で戦闘服を着ているＹＭをＴＴの服に着替えさせ、ついでに変装させた。

「先輩？」

「なんだ？」

「先輩はＩＦ隊長を『Ｆ子ちゃん（ここだけ、ＨＧの口真似(笑)）』と呼んでいますが、お二人はどういう関係ですか？」

「…ああ、そのこと？」

「あっ、私も聞きたいです」

後席に座っていたＴＴも身を乗り出す。

「ＴＴ…お前」

「私だって、ＩＦ隊長との事知りたいです」

「あれ？ＴＴは、Ｆ子ちゃん知らなかったっけ？」

「知らないです」

「わーったよ」

ＨＧはＩＦとの関係について語りだした。

「俺とＦ子ちゃんは、俺が前の会社に中途入社して間もなく、知り合いになった…っと言っても、俺は本部の教導隊の教官で、Ｆ子ちゃんはＫ府領地の副支部長だったけど…彼女も俺と同じく正規軍リストラ組…ＨＹは覚えているかな？お前さんの入社式でＫ府領地支部長代理として挨拶していたの」

「うーん、どうだったかなぁ…」

「社長の紹介でＦ子ちゃんが隊員の教育に熱心なのを知って色々意見交換していたんだ。その後もＦ子ちゃんとは社内メールなどでお互い教育資料やそれの意見交換をしていて、一時Ｆ子ちゃんがＫ府領地支部長になるための研修で本部に来ていた頃は、隊員教育とか

夜の飲み歩きとか(笑)…一緒に居ることが多かったね」

「それで？」

「やがて、F子ちゃんが正式にK府領地支部長に昇進して、K府領地支部に戻ってからも意見交換は続けていたけど、K府領地支部でF子ちゃんが指揮するある戦闘で大きな損害を出して、結果支部の閉鎖と支部長を解任され、挙句に一部隊長にまで降格されて、生き残った部下と共に本部に併合されてね…散々だったねぇ。その時のF子ちゃん、結構荒れてたな…」

「…そんな事が…」

「ああ、そうか…TTはF子ちゃんがK府領地副支部長時代に転職して来て、F子ちゃんがK府領地支部長に昇進するための研修で本部に来た頃には、既に結婚退職していたか！」

「そーなりますかね…」

「HYはF子ちゃん知ってるだろ？」

「はい、准尉が言いました通り、IF隊長はK府領地支部長に昇進する時の研修と、K府領地支部が閉鎖されて、本部に併合された後、私が会社を辞めるまでは、准尉の隊員教育の場と飲み会によく顔を出していましたね」

「…と言う事さ、YM…F子ちゃん、あれでもK府領地支部長時代は〝准尉の尉官待遇〟だよ」

「そうなんですか！」

「あっそれからな、F子ちゃんとお前（YM)、同い年だぜ！」

「ホントですか！？」

…その頃…

「ぶぇっくしょん！ちくしょーー」

「ＩＦ隊長、どうしましたか？」

「多分、奴（ＨＧ）が悪口言ってやがる…」

●市街地潜入

市街地は多くの警察官や正規陸軍の兵が巡回していたが、街の様子は普段とあまり変わらなかった。ＹＭの案内で外務大臣とＣ国の大使が居る可能性が高い県庁と市民大ホール、高級ホテルを再度見て回るが、いずれも特に立入禁止区域に指定された場所はなかった。ただ、港と駅は相変わらず正規陸軍によって閉鎖されていた。

ＨＧは爆発現場の地図をＹＭに見せた。爆発現場は市街地の警察署や通信施設等の重要施設ではなく、雑居ビルの一室とか商店とか、以前見た事を付け加えて…ＹＭは地図を指さしながら、いずれも競合他社の民兵会社が構えている場所である事を説明した。念のため、ＹＭの案内で地図に印がない他社の事務所のある場所に行くと、やはり爆破されていた。

ＨＧは混乱する。外務大臣とＣ国の大使一行を狙ったテロがあるなら、重要な施設ではないのかと…それが全部無事であることに疑問を持った。逆に民兵会社が狙われたのは何故か、ＨＧはテロリストが、武装組織である民兵会社を狙った可能性を仮定した。そうすると、当然ＹＭの支部事務所にも何かあったはずである。

ＨＧはＹＭの支部事務所に行く途中で、ＹＭ、ＴＴ、ＨＹ達に町にあるファストファッションの店で服の上下セット等の安売り服を大量に買い込ませた。

民兵会社ＤＫの支部であるＹＭの事務所は市街地郊外にある。民兵会社ＤＫは、古い歴史を持っていて、Ｆ県領地では初めて支部を皇国政府軍時代に開業した。なので、この事務所を預かる支部長は一般企業で言うと支店長クラスの権限を与えられている。しかし、軍縮以降、Ｆ県領地内に新興の地元民兵会社が数社でき、売り上げが赤字にまで下がったので、何

度も支部長が交代させられ、ＹＭがつい最近支部長に採用された。
ＹＭの案内で支部の建屋近くに潜入する。監視カメラを警戒しつつスキを巧みについて、ドローンを飛ばして支部付近を確認すると、支部は何事もなく存在していた。しかし、案の定、支部の建屋を監視できる場所から、警察官が見張って居るのを見つけた。警察がテロに加担しているのを不審に思いつつ、なぜＹＭの支部の建物が爆破されていないのだろう…と考えた。
ＨＧはもしかすると、ＹＭとその部下達が戻ってくるのを待ち伏せているのではないかと考えた。

市街地に戻ったＨＧ一行は、市役所と駅の間にある喫茶店に入り様子を観察する。
「…おかしい…」
窓から外の様子を見ながらＨＧはつぶやく。
「心当たりの場所を見てきたが、外務大臣と大使が監禁され、特に警官隊とか軍が包囲している様には見えない…」
「よそに移されたのでは？」
ＹＭが不安げに言う。
「そうかもしれないし、そうとも言えないし…」
「前に市街地に来た時と見たところ街の様子が変わらないんだ…なぁＴＴ」
「ええ…」
ＴＴも前にＨＧと歩き回った時と比較して言った。
「でも、なんか街中を歩いている警官が多いなぁ…」
ＨＧが不審に思って言うと、
「なんなら、そこを歩いている警官に聞いてきましょうか？」

とＹＭが言った。
「んー、待て待て。さっき支部に行ったとき、支部の周りは警察官が張り込んでいる。もしかするとＹＭ自身が手配されている可能性もある」
「…私が？」
「うん、他社の民兵会社の社屋は全部爆破されていたし…民兵会社を目の敵にしているような…」
とＨＧが言って、ふと、ＹＭに対して
「そういえば、ＹＭ。お前事件前に何度か市役所に呼び出されたよな。あの時はロクに聞けなかったが」
「ええ…」
「市役所で何言われたか詳しく教えてくれ。また、なんでＩＦがここに来たのかもう一度教えてくれ」
「はい」
と言って、ＹＭは、
「外務大臣とＣ国大使達の事件前日からのスケジュールは、事件前日の午後、外務大臣がＣ国大使と共に、飛行機で空港に到着。その日の夕方に高級ホテルで会食をし、事件当日の朝から会談。その日の午後ホテルの大広間で記者会見して、それから皇立大学の大講堂で学生に対してＣ国大使が公演と学生とのディスカッションをします。その後、高級ホテルに宿泊して、次の日外務大臣の実家がある内海の海が見える温泉地に移動。外務大臣が大使を歓待して、翌日空港から外務大臣と大使は特別機で帝都に帰都…となっています」
「成程」
「私は事件の１週間前から、外務大臣一行が空港に降り立った後の警護のスケジュールと割り当てについて他の民兵会社の人達と打ち合わせをしていました。事件前日の夜も打ち

合わせがあり帰ってきたら、本部から応援の２個分隊が輸送機で来るということで、翌朝部下を連れて空港に迎えに行きました。その時に市内に爆発音が聞こえたので、ＩＦ隊長の指示でトラックに分乗し、（Ｆ県領地の）半島を東に向かい、途中の漁港で燃料・食料の補給と、ＩＦ隊長の命令でＩＦ隊長の部下２名に行動を制限する装備と共に、対岸のＯ県領地に船で移動させ、向こうで本部と連絡を取り、その結果をＩＦ隊長に転送報告するよう命じて渡海させました」

「ＴＹとＩＹの事だな」

「そうです。その後私達は、山の中のあの場所まで一旦引きました。ＩＦ隊長がこちらに来た理由はトラックで避難中に伺いましたが、前々日の朝にＯ県領地にある海軍基地から、本部に直接連絡があったそうです。『Ｆ県領地で外務大臣と大使を標的としたテロが起こる』と…で本部の命令で急遽２個分隊が結成され、こちらに派遣したそうです。その理由も、『Ｆ県領地の民兵会社の中で唯一当社が帝都に本社がある企業だということで…Ｆ県領地の民兵会社はあてにならない』と…」

ＹＭの説明を聞いたＨＧは驚いて、

「なんだってー！聞いてないよ――。Ｆ子ちゃんそんなこと言ってないし！！」

ＨＧは「（ＩＦも本部と同じく正確な情報をわざと隠して伝えないのはあいつら（日和見保身内密主義の上層部）のやり方に染まったな…）」と思った。ＨＧもＩＦ同様…いや、ＩＦと異なり本部内の業務が多かったので、ＩＦ以上に本部のやり口に日常的に翻弄されていた。それを持ち前のバイタリティーで社内はおろか外部まで巻き込んで、任務を完了し続けていた…そのため、ＨＧの上司である日和見保身内密主義の上層部はＨＧを疎ましく思い続け、ＨＧが退職する年齢になったら、いろいろ口実（定年延長で給料がかなり下がる等）をつけて退職する方向に持って行った。ＨＧはそんなことは百も承知なので、退職関連書類にさっさとサインして退職した。

そんなＨＧの頭の中で途切れ途切れになっていた短い線が次々に繋がっていくよう感覚を覚えた。

「それだ！海軍が『Ｆ県領地の民兵会社があてにならない』と言っていたよな？」

「はい…」

「海軍はなぜあえて本部にテロの話をしたかだ…『民兵会社の中で唯一当社が帝都に本社がある企業だということ』…それは何を表しているか…海軍は、テロの情報を知りながら、なぜそれを外務大臣と大使を守る立場の地元Ｆ県領地の軍関係者には話せないんだ？」

「なぜ？」

「もしかすると…Ｆ県領地の警察や駐留する正規陸軍も最初からテロに一枚かんでいるということ。Ｏ県領地に基地がある海軍はＦ県領地の正規陸軍や民兵会社を警戒して話したくない…しかし、テロ自体は未然に防ぎたい。だから、本部に通報したんだ。あんたのところで未然に防げないかと…なぜなら、海軍基地の目の前でテロがあった日にゃ、メンツがつぶれるからだ。ただ、海軍の誤算はＦ県領地の民兵会社は、テロに加担していなかった事。テロリストたちは事件発生後すぐに武装している民兵会社を潰しにかかったからね。やはり、その中で唯一逃げた当社（ＨＧは退職したけど、今は臨時雇いのため）の兵を今も血眼になって探しているはずだ」

ＨＧは窓の外を見て、意を決すると

「なら、長居は無用だ、移動しよう」

と言って、ＨＧは伝票を持って立ち上がった。後の３人はＨＧに続いて席を立った。

会計を済ませると、出口で警官と鉢合わせした。

ＨＧは「ヤベッ」と思ったが、警官は４人を見過ごした…どうやら、まだＨＧ一行の面は割れておらず、ＹＭも変装していたので、見た目には近所の会社の部長が部下のＯＬ達と喫

茶店でだべっていた…位に見えなかった。

早歩きで追っ手をさりげなく街角の監視カメラも気にして、警戒しながら、ＨＹの軽ワゴンを止めていた駐車場まで来た。念のため、駐車場の周りを迂回して警戒しつつ、ＨＹの軽ワゴンに近づく、待ち伏せ等がないことが分かると、ＨＧが駐車場の精算機に料金を投入している間に他の３人はさっさと車に乗り込みエンジンをかけた。清算が終了し、車止めが降りるのを確認して、ＨＧが乗り込み「さて、返るぞ！」と言った。

●正規軍反抗失敗

その帰り道、車中でＨＧの持っている短波ラジオから、Ｆ県領地で起こっている謎の事件に関して皇王が調査を命じ、帝都から近衛師団がＦ県領地半島の付け根の外海側の海岸から上陸を試みるも上陸部隊は行方不明になったことが報じられていた。

同じニュースを地元放送局の周波数に合わせたが、何も報じていなかった。

ただ気になるのは、Ｆ県領地から外に向かう幹線道路について、交通情報では『道路に巨大な陥没が起こり、現在通行止め…復旧の見通しは立たず…』と言っていた。『他の主要な街道も工事で通行止めとか…』色々な理由を付けて通れないようにしていた。

「近衛師団が上陸しようとして阻止されたようだ…」

と、ＨＧは車内にいる皆に言った。

「阻止された…ですか？ラジオでは行方不明と言っていますが？」

ＴＴが直ぐに反応した。

「マスコミの情報操作に踊らされるな。全滅に近い損害を受けたのかもしれない」

とＨＧが言うと、ＨＹが

「近衛師団ですよ！まともにやりあったらＦ県領地の駐留部隊なんかひとたまりもないの

に…」

「白兵戦ではね…Ｆ県領地の正規陸軍には戦車や装甲車があるからね。それでも、Ｆ県領地の正規陸軍は戦力を割く必要があるから、師団兵力全部を上陸地点に向ける事はできない」とＨＧは言って、いきなり〝親父モード〟になった。

ＨＧ「では質問！最低限、上陸地点に割り振る兵力はどのくらい？」

ＴＴ「逆に、都市部と交通要衝を抑えるにはどのくらいの兵力が必要かということですね…」

ＹＭ「ここの都市には正規軍の連隊クラス（１，０００人規模）の駐屯地があり、また民兵会社が数社ありますね」

　ＹＭがＨＧ達の会話に恐る恐る加わる。

ＴＴ「民兵会社は、先程の偵察では全部潰されていました。兵力には正規陸軍と地元警察だけ…」

ＨＹ「昨日の話では、警察はシビリアン・コントロールに長けているから、都市部と交通要衝を抑えるには警察だけで十分なのでは…でも、港や駅、県境は軍が抑えていたわね…でもそんなの各所一分隊でも十分だから、そんなに兵力は減らないのでは？」

ＨＧ「その通り。余剰兵力は師団クラスの正規陸軍の約６割…とは言い難いが、他の事態を想定して割ける兵力はその約半分位かなぁ…当然県領地境には、隣の県領地のＳ県領地の駐留正規陸軍が居るから…それでも精鋭の近衛師団を打ち破ったのはおかしい…」

ＹＭ「他に兵力があると？」

ＹＭは素直に聞いた。

ＨＧ「そうかもしれないので、上陸地点の近くまで行ってみるか、Ｆ子ちゃんの所に戻るより、こっちの方が近いし…」

と、ＨＧは夕暮れが迫る中、今度は半島の北側の上陸地点に偵察に向かった。

地図を見て、敵の見張りが居なさそうな場所を探し、軽ワゴン車を海岸からかなり離れた場所に隠して、徒歩で海岸の方に歩く。岬に続く尾根に隠れてドローンを飛ばす…こういったときにドローンは便利なモノだとＨＧは感心する。ドローンを垂直に上昇させただけで海岸の全貌が見える。

「こりゃあ、ひでー」

とヘッドマウントディスプレイを越しにドローンの送ってくるカメラ映像を視てＨＧは言った。

ＹＭ、ＴＴ、ＨＹはＨＧの持っているスマートフォンの映像を見て手で口を覆って息を飲んだ。

そこで見た光景は、明らかにＣ国の兵士と捕虜になった皇国側の近衛師団の兵隊。

「ＨＹ、ラジオの周波数をチェックして。周波数帯域××ＫＨｚ」

ＨＹはＨＧの短波ラジオアンテナを伸ばし、イヤホンを耳に入れ、ＨＧ指定した周波数帯にメモリを合わせる。その途端、ＨＹがビクッと反応した。慌ててイヤホンをむしり取る様に外した。

外したイヤホンから「ザーザー、ピーピッピ」などの甲高い音がしていた。

ＨＧは、ドローンを回収してヘッドマウントディスプレイを外すと、耳を抑えているＨＹを見た。

「大丈夫か？」

「ハッハイ、大丈夫です。ノイズの大きさに驚いただけです」

「最初から、音量上げていただろ…こういう時はボリュームを最小にしてから徐々に大きくしていくものだ…」

それを聞いたＹＭは、

「先輩、ノイズ計測時のスペクトラムアナライザのレンジは最大から下げるじゃありませ

んでしたっけ？」
と訊ねると、ＨＧは呆れて
「それは、測定機器を使う場合でしょ！」
「…そうでした」
ＨＧは短波ラジオのアンテナを回して、強いノイズが出ている方向を探った。やはり、海岸の方から来る電波が強い…
「ビンゴ！敵はＣ国の兵士だ！長居は無用…引き上げるぞ」

引き上げる車中でＹＭはＨＧに質問した。
「先輩、先程海岸でＨＹにラジオの周波数をチェックさせましたが…確か周波数帯域××ＫＨｚ…と」
「あれはね、Ｃ国の兵士が通信に使う周波数なんだ…」
「えっ、なんで知ってるんですか？」
「過去の戦闘でＣ国の通信機を手に入れて、使用する周波数を調べたことがある。それで覚えているのさ」
ＨＧはカラカラと笑った。

●まとめの時間
ＩＦが居る所に戻る途中のコンビニの駐車場で食べ物や飲み物を購入して、車内でＨＧ達は〝親父モード〟で今までの偵察内容をまとめる…
ＨＧ「さて、今まで見聞きしたことを整理しよう…まさかＣ国の兵士が居るとはね…」
ＴＴ「Ｆ県領地の人達が人質に取られている事は決定ですね」
ＨＹ「それを、Ｆ県領地の政府軍と警察がそれを行っている」

ＨＧ「うん…」
ＨＹ「Ｃ国の兵隊は我が国の精鋭の近衛師団の上陸を阻止したから、味方ではないですね」
ＴＴ「そうですね、もしＣ国の兵隊が大使奪還に来たのなら、近衛師団と協力するはずです」
ＨＧ「そうだ」
ＨＹ「やはり、あいつらの目的はＭＯＸ燃料の強奪とすれば？」
ＹＭ「ＭＯＸ燃料？」
ＹＭはＨＧ達が突拍子もない事を言っているので仰天した。
ＨＧ「…そうだ、ＹＭ。俺達は、今まで集めた情報を分析して、今回の事件は、何者かがＦ県領地にある核施設内にある核燃料再処理施設に保管されているＭＯＸ燃料を奪うことにあるのではないかと推測している」
ＹＭ「…そっ、そんな大それた事を？」
ＨＧ「そうだ」
ＹＭはまだＨＧ達についていけなかった。
北側の海岸へ行く途中もそうだったが、ＹＭはＨＧがＴＴ、ＨＹと次々考えを述べながら状況整理する手法を改めて驚いて見ていた。
ＨＹは現役時代、新兵教育の時にＨＧから論じ合う訓練を受け、その後も本部内でＨＧと論じ合う機会を経験し、自身も自分の部下達に行っていた経験がある。ＴＴもＨＧに教育訓練を受けていたし、前日の温泉旅館で同じ事をしていたので、盛んに意見を交わす。
まだ、ＹＭは掛け合いみたいな論戦の感覚についていけなかった。そこで、ＨＧはＹＭを論戦に巻き込むため、質問を投げかけ、論戦に参加させた。
ＨＧ「ＹＭは、外務大臣について何か知らんか？」
ＹＭ「そういえば…大臣はここ地元の出身で警察署所長、正規陸軍駐留部隊司令官を経て政界に進出したと聞いています。ここが大臣の選挙区です」

ＨＧ「それだ、正規陸軍と警察がグルの理由は！」
ＹＭ「？？」
ＨＹ「大臣は自分の選挙区の地元住民を人質に取っているということ？酷いんじゃない？」
ＨＧ「だから、極力そう感じさせないため市街地は放置状態なんだ」
ＨＹ「納得！」
ＨＹ「大臣は大使に脅されて、ＭＯＸ燃料を？…どう？」
ＨＹ「大臣が大使に…大使が大臣に…あれ？」
ＨＧ「ＨＹ、何が言いたい？」
ＨＹ「アハハ！いや、どちらがどちらを利用しているのか、判らなくなりました」
ＨＧ「分けて整理してみろ」
ＨＹ「大使が大臣を脅している場合…既にＭＯＸ燃料をＣ国の兵隊が抑えていることになります」
ＨＹ「逆に大臣が大使を脅している場合…ＭＯＸ燃料をあげるから、Ｆ県領地占拠に協力しろかと…アレ？こっちは意味がない！」
ＨＧ「…だね。多分前者…Ｃ国の兵隊は既にＭＯＸ燃料を手に入れていると思う。まだ半島の核施設付近に行ってないから分からないけど、前者の理論だとこの事件の辻褄が合う」
ＹＭ「…でも、決め手に欠けますね…」
ＴＴ「そうですね、大臣が地元民を人質に取っている理由が不明確ですね」
ＹＭ「なんとなくですが、実は敵は名目上大臣と大使を人質にして、世間の目をひきつけている間にＣ国の兵がＭＯＸ燃料をＣ国に運び出す筋書きはどうでしょう？」
ＨＧ「ＹＭ、スルドイ！それは、あり得る」
ＴＴ「ＭＯＸ燃料を運び出すのを誰かに見られたくないので、Ｆ県領地の人の出入りを制限しているのでは」

ＨＹ「…ということは、Ｃ国の兵隊は、核施設と半島の反対側にある北側の海岸に別れているということ?なぜ?」

ＨＧ「それは…」

と言って、ＨＧは地図を広げる。地図を見て一同納得した。

「これで、綺麗にまとまったな！ありがとＹＭ」

「はい！先輩！！」

ＹＭはＨＧに褒められて舞い上がった。

まとまった答えは、

1、現在Ｆ県領地は閉塞されている。閉塞しているはＦ県領地の正規陸軍と警察…その理由は、外務大臣がかつて両方の要職を務め、トップに息のかかった者が占めている。

2、大臣に閉塞を命令したのは大使。大使は既にＦ県領地にある核施設をＣ国の兵隊によって占拠しているので、核施設を破壊されたくなければ、自分の要求を聞けと。

3、大使の要求は、我が国に対して、核施設とＦ県領地民を人質にする事。…しかし、それは我が国政府に対する見せかけである。

4、大使の真の目的は、プルトニウムの詰まったプルサーマルＭＯＸ燃料を外部…多分Ｃ国に運び出す事。ＭＯＸ燃料を運び出すのに時間がかかるから、その間は人の往来を極力減らす必要がある。またＭＯＸ燃料を運び出す場所は、Ｆ県領地の北側で唯一砂浜のあるＳ県領地県境近くにある海岸。その理由は、半島の北側は切り立った断崖で船がつけられないし、半島南側の内湾には対岸のＯ県領地の海軍基地が邪魔。本当は核施設がある場所の核燃料積載用の埠頭から運び出すのがベストなのであるが、核施設は半島東側の湾内にある。

5、外務大臣と大使の今居る場所は外務大臣の実家と別荘がある内海の海が見える温泉地。そこから、対岸のＯ県領地に基地がある海軍軍港を監視している。

海軍は、F県領地の外海で以前から不審な船（多分潜水艦か小型特殊艇）の行動を察知してF県領地に何か起こると考えたまでは良かったが、F県領地の正規陸軍に伝えても一笑に伏されてしまった（そりゃ当のテロリスト本人だから…(笑)作者)。

そのため、海軍に計画が漏れていたのを知り、テロ活動の開始を早めた。

念のためF県領地に支部がある民兵会社DK本部にも話をしたが、IFの到着直後にテロ活動が起こってしまった。

「多分内海は、湾の入り口に機雷でもバラまかれているねぇ…」

と言って、HGはパイプを咥え、火をつけて忌々し気にふかした。

「…ちょっと先輩、締め切った狭い車内でタバコを吸わないで下さい！」

と言って、YMが手をバタバタと振った。HGは「…ああっ、スマン」と言って窓を開けた。

●再び狼と狸

「お帰り」

すっかり日が暮れて、IFがHG達を迎えた。迎えたにしては、IFはむくれていた。

「ずいぶん遅かったじゃない…どこかで美味しいものでも食べて来たのぉー？」

やけにねちっこいIFの言葉に、HGは「(こりゃ、相当腹減ってるな…)」と感じて、わざと挑発するように

「そうだよー、街中の美味しいラーメン屋をYMに教えて貰って食べてきた…」

HG話に「(うっそー！街中ではロクに食べていない、せいぜい喫茶店でお茶したくらい…。何を挑発してんの、先輩ぃー)」と、YMは心配になった。

「あんた…ウグっ」

IFは空腹のあまりにHGに怒鳴ろうとしたタイミングでIFの口にHGが何かを押し

込んだ
「…エナジーバーだ。町で買ってきた。人数分ある」
とＨＧは言った。

いじけてエナジーバーを齧るＩＦにＨＧは、市内や半島の北側の状況をドローンの撮影した動画をスマートフォンで見せながら説明し、その後で、今までまとめた結果を報告した。
…あくまで、ＩＦがＨＧに言わなかった話については触れずに…ＩＦも本部の犠牲者なのだからとのＨＧの計らいで。
「このことを外部に伝えなきゃならん」
ＨＧは地図をＩＦに見せながら、決断を促した。
「…そうね」
「現在のここにいる兵力だけが、あちらにとって反抗勢力だ」
「…そうね」
「この勢力でやりあって勝てるかね？」
「…」
「俺はここ…Ｆ県領地からの撤退を決めた。賛同するかね？」
「…」
「向こう（内海の対岸）に行ってから、上（民兵会社ＤＫの日和見保身内密主義の上層部）に俺の事悪く報告していいから…責任はとる」
「…」
ＩＦはＨＧの目をジッと見つめると
「…わかったわ、ＨＧの作戦に従います」
「そう来なくっちゃ！」

未だに撤退命令または任務続行（どうやって？）命令のどちらも出さない本部を見捨て（多分、日和見保身内密主義の上層部が故意に決定を下さないと考えられる）、またＣ国の兵隊が居ることから、これ以上のこの地（Ｆ県領地）に留まるのは無理と判断し。ＨＧは勝手に撤退をする事を決めた。

…ここから、ＨＧの指揮による撤退戦が始まった。

ＨＧは、スマートフォンを見た。運よく圏外になっていた。

「全員、今すぐ全部のスマートフォンや携帯端末の電源をＯＦＦにしろ！」

「何故ですか？」

「警察がテロに加担している。あいつらスマートフォンや携帯端末の位置情報からここに俺達が居るのがバレるぞ！！」

「私物もですか？」

「そうだ！ゲームや動画視たり、チャットがしたいだろうが、生き残るためだ、我慢してくれ」

それを聞いて、隊員たちはスマートフォンの電源をＯＦＦにした。

「作戦を説明する」

すっかり日が暮れて、ＨＧは地図を広げてＬＥＤライトを上から照らすように隊員一人に命じて、自らはポケットからパイプを取り出し、口に噛む部分で地図を指して、

「まず、ここから徒歩で林道を通り、この山村を通って、街道に出る。それから…」

ＨＧはＩＦが外から対岸に逃げたと見せかけた半島南部の漁港に向かうことにした。と

は言え、いつＦ県領地の正規陸軍と警察またはＣ国の兵隊と遭遇するか判らないので、地図を頼りに安全経路を策定し、結果、迂回策を取らざるを得なかった。

「…さて、諸君生きて帰ろう！」

「「はい！」」

と、全員元気に返事をする。

「でも、その前に！」

とＨＧが言ったので、何人かがコケル。

「まだ見ていない東側の核施設に偵察に行きたいのだがどうだ？」

「…」

全員、無言。誰も手をあげない。

「そりゃ、そうだろうなぁ…せっかく帰る気でいたところに、気まぐれのような提案するのだから…じゃ、途中で何か食べさせるから、行く人！」

と言ったら、全員手を挙げた…皆空腹なのである。

「皆連れて行くわけにはいかん！７人まで…今度は武装してトラックで行く。向こうでドンパチあるかもね。従って、ＴＴ、ＨＹは留守番」

「「エー！」」

ＨＧは、ＩＦ達の民兵会社支給のスマートフォンを預かると、ＩＦとＹＭ用は返して、それ以外を外部から強制起動できるように細工して軍用トラック積んだ。そしてＨＧは７人選抜し、道案内にＹＭを同行させることにした。

「じゃ、やる事決めたから、ひと眠り…みんな寝ろ！明日は早いぞ」

と言って、ＨＧはＨＹの軽ワゴン車の助手席シートを倒して眠りについた。

翌日未明…ＨＧはＹＭそれに選抜した隊員をトラックに乗せると自ら運転席に乗り込み、

「乗ったかー！」

「「ハーイ！」」

と言う景気の良い返事…でもなにかおかしい…フェンダーミラー越しに見ると、選抜した７人以外に数人が荷台に乗っていた。荷台に乗っているのは皆完全武装しているので、「まっ、いいかぁ…」と言ってトラックを出発させた。

ＨＧが選抜以外の数人を乗せてそのまま出発したので、てっきり非選抜の人は降ろされると思っていた者は歯噛みして悔しがった。ところが、数メートル進んだ所でトラックは急停車した。

運転席からＨＧが降りてきて、「ハイ、おふざけはここまでー、てめえら降りろ！」と怒声をあげて、トラックの後輪を強くけった。

慌てて、選抜以外の隊員が飛び降りる。ＨＧは再びトラックの運転席に座るとトラックを出発させた。

林道から、わざと海岸沿いの街道を使って、半島に東側の核施設に向かった。途中でトラックに乗っている隊員達を市街地で買ってきたファストファッションの服に着替えさせ、コンビニエンスストアに立ち寄り食べ物と飲み物を買わせた。

「なんか、聞いているのと違う…」と言った隊員がいるので、「偵察が終わったら、ちゃんとドライブインに寄ってあげるから」と励ました。

ＹＭの案内で、核施設を覆うようにそびえている山の麓に着いた。そこから徒歩で山登りをする。辺りに対人センサー等が張り巡らされてないかを警戒し、道なき道を藪漕ぎしていくので、戦闘服を着た兵士たちが銃剣で下草を払いながら先導する。ＨＧの前を歩く戦闘服姿のＹＭは「(…だから、ＴＴ、ＨＹを置いてきたんだ…)」と戦闘服ではなく私服のＴＴ、

ＨＹの姿を思い出していた。

●核施設の裏山の山頂付近

ＨＧは持ってきた民兵会社支給のスマートフォンの電源を入れ、山の尾根に約１０メートルおきに散布するよう隊員に指示をした。その間ＨＧは山頂から核施設の様子を双眼鏡で伺う。丁度朝日が核施設に差し込み、よく見える。

これだと、何か移動しているモノがあれば影が長いので見つける確率が高くなる。一方ＨＧ達は核施設の西側の山の尾根に居るので、核施設に居る相手からは発見しづらい。

ＨＧはドローンを使おうかと考えたが、あまりにも距離がありすぎた。ＨＧとＹＭは核施設内を双眼鏡で人影を探すが見当たらない。

やっと見つけた人影は施設の作業員である。ＨＧは焦る。施設内にＣ国の兵士が居る事が分かればいい。

ＨＧはハタと思いつき、短波ラジオを取り出し、先程の海岸同様短波ラジオアンテナを伸ばし、イヤホンを耳に入れＣ国の兵士が通信に使用している周波数帯にメモリを合わせる。

通信らしいノイズを聞き取り、短波ラジオのアンテナを回して、強いノイズが出ている方向を探った。やはり、核施設の方から来る電波が強い…

ＨＧは核施設にＣ国の兵士が居ることを確証したが、決め手にかける。その時、ＨＧの横に居た隊員が、ＨＧの肩を叩く

「なんだ？」

「あそこ…」

隊員が指で示した方向に施設の作業員と異なる格好をした数人の人影が見えた。

ＨＧとＹＭは慌てて、そちらに双眼鏡を向ける。そして、

「ビンゴ！Ｃ国の兵士だ！よくやった！」

ＨＧは教えてくれた隊員に礼をいうと、スマートフォンとスナイパースコープを取り出し、スマートフォンのカメラでスナイパースコープ超しに写真を撮ると、

「長居は無用…引き上げるぞ」

山を急いで駆け下り、トラックのナンバープレートに細工して、トラックに飛び乗るとすぐに走り出した。

「先輩…先程のスマートフォンは？」

「…ああ、ヒ・ミ・ツ」

と言って、ＹＭに向かって片目をつぶった。

「でも、電源を入れましたよね、あれじゃ見つかります！」

ＹＭが心配して言うと、

「だーーいじょうぶ。位置情報発信機能と電話発信機能は止めてあるから…今は受信のみ」

と言って、カラカラと笑った。（…アレ？なんか忘れているような…作者）

●さて、帰ろう！

ＩＦの所に戻るとＨＧは

「やっぱり核施設にも敵さんが居たよ」

と言って、スマートフォンの写真を見せる。

「ずいぶんハッキリ写っているわね！そんなに接近したの？クロスサイトまで写っているけど…」

ＩＦはＨＧがスマートフォン単体で撮影していないことを知りながらボケる。

「いんや、核施設の裏山から…多分差し渡し２キロ位？スナイパースコープの接眼部にスマホのカメラ押し付けて撮っただけ…最近のスマホのカメラって、補正機能が優秀だねぇ

…」

と、ＨＧがＩＦのボケに突っ込みも入れずに言うと、ＩＦは「(突っ込まんのかい！)」と思いつつ

「…そうね、確かにＣ国の兵士ね…よく映っている事」

と白々しく言った。

これで、今までの仮説の裏付けが取れたので、今度は本当に半島を脱出する。

ＨＧは懐から拳銃を抜いた。拳銃の安全装置を解除し、拳銃の弾倉を一度抜いて弾丸を確認すると再び弾倉を拳銃に装填してからスライドを引いてマガジンの中の弾丸をチャンバーに送り込んで安全装置をかける。それを見たＨＧを知るＩＦ、ＴＴ、ＨＹは「(准尉、本気だ！)」と思った。

「みんな準備はできたな？」

とＨＧが言うと、皆無言で頷く。

「何も残していない？」

「野営した痕跡は消すのよ！」

「トラックはカモフラージュネットを掛けてるわね！」

とＩＦとＹＭは隊員達に指示しながら辺りを見渡した。

「お互いの相方は決めたな！(部隊前進時に二人一組となって互いにバックアップを取るため。ツーマンセルといいます。作者注)」

「「ハイ！」」

「それでは、帰るぞ！1列縦隊で俺に続け、出発！」

先頭にＨＧとＴＴ、その後ろにＩＦとその部下。更にＹＭとその部下が続く。殿はＨＹ。

ＨＧは自分のスマートフォンで電波が入る事を確認できる位置まで移動すると、撤退前に核施設付近にばらまいた民兵会社支給のスマートフォンを一斉に起動させる。

ＨＧはＩＦとＹＭに一斉起動した民兵会社支給のスマートフォンについて地図を見せながら説明する。

「戦の時に遠くを攻撃すると見せかけて近く敵を油断させて攻撃する戦法『声東撃西』これは、『東を攻撃すると偽り西を攻撃する作戦』…もっともこの場合、東を攻撃すると見せかけて南に逃げるのだけど…」

それを聞いて、ＹＭは先程核施設の裏山でＨＧがやったことに納得した。

一方、ＨＧの起動した民兵会社支給のスマートフォンの位置情報を携帯電話会社の基地局で探知した敵であるＦ県領地の警察は慌てた。探していた民兵会社の残党があろうことかＣ国の兵士が占拠している核施設の裏山に居ることがわかったのだから。また、その時刻の前に他府県ナンバーのトラックが核施設に向かって街道を移動していたのを街道に設置してあるナンバープレート読み取り装置の幾つかが捉えていた。

なにも知らない（ハズ）の民兵会社の隊員が核施設にいるＣ国の兵隊と衝突したら大変なことになると…これは、何とかしないといけないと考え、正規陸軍に連絡した。

山中から林道を進み、山を下りて山村に出る。そこからが大変。街道に行くのに、警戒して村の建物に身を隠しながらの前進。敵に遭遇する可能性は低いが監視カメラは警戒して迂回する必要がある。ＨＧは都度監視カメラの位置を地図に書き込む。山村を抜け、次の村にいく間は道を警戒してただ歩く、次の村に着いたら、前の山村の時と同様、建物に身を隠

しながらの前進…この繰り返し。その間、ＨＧはＨＹに短波ラジオを渡し、正規陸軍の使用する周波数帯に合わせてモニターするように指示をした。

半島を一周する街道に出る。そこで林に隠れて様子を伺う。途中、ＨＹから正規陸軍の使用する周波数帯に盛んに何か通信をしているらしい…と言う報告を受けていた。

ＨＧは地図と時計を見ながら「そろそろ、通過すると思うが…」と、独り言を言っていた…ＨＧの隣にいるＴＴは「何がですか？」と訊ねると、ＨＧは「面白いモノ…」と言って、ＴＴにウインクした。

やがて、正規陸軍の兵士を乗せた数台のトラック車両が、法定速度を無視して核施設の方向に通り過ぎて行った。

「…しめしめ…やっこさん、引っかかったぞ！」

ＨＧはニヤリとして言った。ＨＧはすぐにでも海岸に向かいたいが、まだおっとり刀で来るかもしれない車両が来るのを待った。

それが来ないのを見極め、ＨＧは街道を渡って漁港に向けて進軍を始めた。

そうして、敵に遭うこともなく、海岸から４キロほどの位置に進んだ。林に潜み辺りを伺う。前方にまた町が見える。ＨＧはゴルフ用レーザー距離計で町はずれの建物との距離を図る。距離は約５００メートル。双眼鏡で町を見るが街中は道が曲がりくねって見通しが悪い。

ＨＧは、「行ってくる」と言って、手に持ったゴルフ用レーザー距離計を後ろに居るＴＴに渡す。「気を付けて」のＴＴの言葉に「うむ」と言って、ＨＧは帽子の唾を持ってはるか先を見つめる…これが今まで何度も繰り返されてきた。

街道の真ん中に立つＨＧ…。一歩一歩歩を進めて町の入り口に近づく。

ＨＧが５０メートルくらい進んだところで、立ち止まる。右手を挙げ、それを軽く前に振り下ろす。その合図に従い、林の中の街道から、一人二人…次々と湧くように出てくる１５人の兵士達。前進した兵士達は背を低くして前かがみで小走り進む。もう半分は林の中でそれぞれ決めた相方の援護のため、各自手持ちの銃器を構える。

※この時のＨＧのツーマンセルのバックアップはＴＴ。ＴＴはＩＦの部隊から自動小銃を借りている。ＨＹは全体の殿であるので、軽機関銃を担いでいる…本来、二人の体格（ＴＴは高身長、ＨＹは低身長）を考えると逆なはずであるが、現場経験とＨＧの心情を考慮している。

そういった状況でＨＧだけは颯爽と進む。皆、ＨＧの挙動に注目していた。ＨＧが歩みを止めれば後ろの兵隊達も立ち止まり、街道の端に伏せたり、座ったりして射撃姿勢を取るものも居た。

もし、ＨＧが撃たれたり、手で合図したら、その場で伏せて応戦体制がとれるように…それは、今まで駐留していた山から降りて街道に出て以来、同じことの繰り返しだった。

ＨＧが１００メートルくらい進んだところで、また立ち止まる。ＨＧはまた右手を上げ、今度は右に軽く振り降ろすと、ＨＧの後ろについてきた兵士たちは、全員各々街道の端に伏せたり、座ったりして射撃姿勢を取る。そのころ合いを見計らって、林の中に残っていた残りの兵士達が一斉に前進する。その間ＨＧはまた歩き出す…林の中に残っていた残りの兵士達が街道の端に伏せたり、座ったりして射撃姿勢を取る兵士達を追い越し、ＨＧの後ろにつく。そして、またＨＧが右手を上げると、ＨＧの後ろについた兵士達が今度は全員各々街道の端に伏せたり、座ったりして射撃姿勢を取る…この繰り返しでＨＧに率いられた部隊は町に近づく。

やがてＨＧが町の中に入る。町の入り口でＨＧが腕をあげて大きく円を描く…それは、目的地が安全であり、集合の合図。

それを見た兵士たちは、周囲を警戒しつつ、一斉に小走りで町に入り、建物の間に身を隠す。全員が町に入ったことを確認して、２人一組で散開して、一通り町の中をチェックして町の反対側の建物にたどり着く。その間、町の人たちはみなＨＧ達を巡回している正規陸軍と思い、姿を見ると建物中に入って隠れてしまった。

●赤ずきんちゃん作戦

町はずれ。約一キロ先に林が広がっている。その間は見通しの良い畑。街道は畑の中を曲がりくねって続き、直線距離では畑を真っすぐ進むのが近い。ＨＧは双眼鏡を使って、林を見ると複数の人らしきものを認める。

「…ここまで無事に来れたが、簡単には通してくれないか…」

とＨＧは歯噛みした。

林を抜ければ、目的地の漁港まで後わずか…はやる気持ちを抑えて、林の中の人影を警戒する。

しばらく考えて、ＨＧはＩＦに

「誰か、斥候に行って欲しいが」

「それなら、ＴＹとＩＹを使いましょう、あいつら、命令違反したから」

「…そんな理由で？」

とＨＧが言うが、ＩＦは頑として聞かなかった。早速ＴＹとＩＹが呼ばれる。ＨＧが林を指して事の次第を言うと、ＴＹは躊躇したが、ＩＹは「私行きます！」と即答した。ＴＹは相変わらず言を左右にして行くのを躊躇っていたので、ＩＦがキレて「ＩＹ、あんただけでも

いいから行きなさい！」と怒鳴った。
ＨＧはやれやれ…と思いながら、周りを見回してハタと思いつき、
「ＩＹ、こっちにおいで」
とＩＹを町の通りにある衣料店の前に連れて行った。そこで、ＨＧは
「ＩＹ、よく聞け。状況は理解しているな？」
「はい」
「俺は、この作戦で誰も死なせたくない。皆無事に返したいんだ。お前が林に行くとして、仮にあの林に居る人影が敵だと、大変なことになる」
「…それは、私が敵に殺されるということですよね？」
「そうだ」
「それなら、構いません」
「構いません？」
「はい、私はこの戦場で死ねれば後悔しません」
「オイオイ…ちょっと待て。そう簡単に死のうとはなんだ！」
流石のＨＧでも腹が立った。
「私なんて、死ねばいいのですから…」
ＨＧはＩＹが命令違反をしたのを自己責任と思い自棄になっていると思った。
「ＩＹ、あのなぁ…お前は命令違反したんじゃない！本部の命令に従っただけだろ。本部はお前たちをハナから見捨てたんだ」
「准尉、それはおかしいと思いますが…」
ＩＹの反論に、ＨＧは否定もしなければ、肯定もしない…ＨＧの〝親父モード〟が出る。
「…そうだな。確かにおかしいかもね。こういうときは、時系列で分解して整理しよう…お前は、ＩＦの命令を守って、対岸に渡り本部に連絡を取ったよな」

「はい」
「そこまでは、ＩＦの命令を完遂したよね」
「はい」
「で、本部は『戻ってＩＦの指揮下に復帰しろ』と命じたんだろ」
「はい」
「じゃ、どちらの命令にも従ったんだよな！」
「はい」
「…だったら？」
ＨＧが諭すように言うと、ＩＹは考え込んでしまった。ＨＧはＩＹが答えを言うまで黙っていた。その間長い時間がかかったようだが、実際は3分程度で
「私は、悪くないです」
「だろ？」
「ハイ！」
ＩＹは明るく返事をした。ＨＧはＩＹの思い込みが解決したと思い。
「しかしながら、斥候の任務は重要だ。初めから死ぬ気で行かれては困る」
「…はい」
「斥候の任務は、何だった？」
「ハイ、敵情を偵察し生きて帰り報告する事です」
と即答した。
「そうだね。だとすると」
「敵から隠れて、あの林まで進みます」
ＩＹはこれから行く林を指して言った。
「そうだ！でもどうやって？林との間は見通しのいい収穫後の畑だ。どうする？」

ＨＧはＩＹに考えさせた。ＩＹはうつむいて黙り込んでしまった。俯いてブツブツ行っていたが、ふとＩＹはＨＧを見上げて、

「夜間ではいかかでしょうか？」

「…夜間か…確かにいい考えだ。これが一刻を争う事態じゃなければね」

「夜まで待てませんか？」

「そうだね、できれはこちらが今明るいうちに街道をあの林まで進んで、夜間に目的地の漁港までたどり着きたいのだが」

「なるほど、でもどうして？夜間に全員が畑を横切って進めばいいのでは」

「それだと、ここの人たちに迷惑が掛かるだろ。また畑に残った足跡からこちらの兵力が分かってしまうのと、逃げたルートが知れてしまう…だから、ここまで街道伝いに来たんだ。それから、夜間に漁港に着く理由は、夜陰に紛れてＯ県領地まで渡海するためだ」

「あっ！」

ＩＹはＨＧの意図を理解した様だった。なんでＨＧが危険を顧みず縦隊で街道を歩いて来たのか、街道の道ならアスファルトや土でも踏み固められているので、足跡が残りづらい…後を追うのには軍用犬でも使わないといけない…ＨＧはＩＹが自分の意図を理解したと感じた。

「そこでだ、俺に考えがある」

「…はい…」

ＩＹは訝しそうにＨＧを見つめる。ＨＧは店の外から衣料店の中を見回し指さして

「この中から、好きな服に着替えろ。金は出す」

と言った。

「ハイ？」

ＩＹは目が点になった。ＨＧは「あっ、できれば地元の人っぽくね…俺は外にいる」と続

けて、ＩＹを衣料品店に押し込んだ。
ＩＹは店内を見回して考え込み、目に映ったショーウィンドの衣装を指して「これを下さい。あとこれと…」と店員に言った。
…数分後、店から出てきたＩＹの格好にＨＧは驚いた。
「准尉、これでどうでしょうか？」
「チョットと、派手じゃない？」
と言うと、ＩＹは
「そうでしょうか？今、この季節ですし…」
と明るく言った。ＩＹが言う通り、今は収穫祭前の時期なので、町の子供たちは仮装して家々を回り祭りを楽しむ習慣がある。ＩＹはその扮装をしたのである。
「ま、いいかぁ…派手なら、あちらさん（林の中の仮想敵）も、度肝を抜かれるかもしれんなぁ…でもいい標的でもある」
とＨＧは空笑いをした。そしてＨＧ衣料品店に代金を払い、扮装したＩＹをＩＦの所に連れてきた。ＩＹの扮装を見たＩＦは仰天して、
「…ったく、なんて格好なの！すぐ着替えなさい！！」
と怒鳴ったが、ＨＧがとりなした。ＩＦが落ち着いたところを見計らって、ＨＧは、
「いいか、ＩＹ。任務は分かってるな？」
「はい」
「それなら、言うことはない…でもどうせ行くのなら…」
と言って、ＩＹにパンや果物、酒瓶等、ついでに手榴弾もおまけに入れて、布巾で覆ったバスケットを渡した。
「これもってけ…ついでにこれも」
と言って、ＨＧは懐から愛銃を渡した。ＩＹは切削加工で丁寧な造りのＨＧの拳銃を左手に

持ち、銃の廃莢口を見て

「准尉、私左利きですよ」

とボソリと言った。それを聞いてＨＧは「しまった、こいつ（ＩＹ）はそうだったー！」と思い出していた。ＨＧの拳銃は弾丸を発射後、薬きょうが銃の右側…すなわちＩＹが左手で撃つと、火薬で熱せられた薬莢が高速でＩＹの顔面目掛けて飛んでくるのである。万が一それが目に当たったら、一大事である…射撃場ではそれを防ぐためゴーグルの着用が必須であるが、ここは戦場である。また、今更左利きの拳銃を探す暇（この時、拳銃を所持しているのは、ＩＦとＹＭのみ）がないので、

「撃つときは、銃を横にして薙ぐように連射しろ」

と指示した。ＩＹはＨＧの指示通りに横に薙ぐように拳銃を持った腕を動かしてみせ、

「こうですか？」

と聞いた。ＨＧがうなずくと、ＩＹは拳銃を立ててまっすぐに構え、

「こう撃たないように気を付けます」

と言った。

ＩＹが「行ってきます」と町はずれの家の門（その門内に仮指揮所がある）から出ていくＩＹは被った赤いケープ中の左手にＨＧの愛銃を隠し、いつでも引き金をひけるよう、安全装置を外し、人差し指はトリガーにかけていた。右手はケープから出して手榴弾入りのバスケットを腕にかけてこれ見よがしに見せていた。またケープのフードを深くかぶった。これだと一見赤い頭巾を被った女の子がバスケットを持って林の方に楽しげ（？）に歩いているように見える。ＩＹの左利きが幸いした。

ＩＹの後方から、ＨＧは双眼鏡でＩＹの行く先を見つめていた。

「…さて、赤ずきんちゃんは林の向こうのおばあさんの元へ…途中に悪いオオカミがいる

かもしれない…どうなるかなぁ…」
と独り言を言っていた。
…後に、部隊内で〝赤ずきんちゃん作戦〟と呼ばれるＩＹの檜舞台である。

他の隊員もハラハラしながらＩＹとその先の林を見つめている。ＩＹの相方であるＴＹもハラハラしながら、塀越しに自動小銃を構えて林の中を見据えていた。
ＩＹは後方の心配をよそに、ルンルン気分で軽やかに歩いて行く。
林まであと５０メートル…３０メートル…１０メートル…ＩＹの姿が小さくなっていく…この間の時間がＩＹの後方にいるＨＧ、ＴＴ、ＨＹ、ＩＦ、ＹＭとその部下達にとって長く感じた。皆、ＩＹの無事を祈っていた。
今のところ、林の中の人影に変わった所はない、やがてＩＹは林の中に消えた。
しばしの間…この時間も長く感じた。
…やがて、林の中から、光が見えた。ＩＹがＬＥＤライトを使って合図した。合図は、「ワレ、ブジ。モクヒョウ、グリーン」…この合図が２度送られた。
それを見た皆、思わず安堵の息を漏らした…そして、一部の者は歓声を上げようとしたが、素早くＨＧ達上官に押しとどめられた。

ＨＧは門から出て、颯爽と歩きだした。ＨＧが１００メートルくらい進んだところで、右手を挙げ、それを軽く振り下ろす。その合図に従い、次々と町からまるで湧くように出てくるＨＹ、ＩＦ、ＹＭとその部下達…今度は町に入る時とは違い、２０メートル置きに前進する相方を援護するように立ったまま射撃姿勢を取る行動を繰り返した。

●ＩＹ

ＨＧ達が町から林に向かった時間を少し巻き戻し、林の中に入ったＩＹは、周囲を見回して、人影が町のキノコ採集の人達と分かり、後方のＨＧ達にＬＥＤライトで合図してから、キノコ採集の人達に声をかけ、後から来るＨＧ達の事を話し了承を得ていた。

そして、キノコ採取の人達が去ると、その場にへたり込んだ。

大きなため息をつくと、途端に虚脱感が襲ってきた。ＩＹはこの作戦に死に場所を求めて後方の補給部隊からＩＦの部隊に志願して来たのであるが、いざ自分が死ぬかもしれない場面の緊張感に遭遇し、結果死なずに済んだ事を感じると、体と心が別々反応をした。

心はまだ死ぬ気でいるが、体は生き残った充実感を求めた。ひたすら喉の渇きを覚え、あたりを見渡すと、右手に持ったバスケットの布巾の隙間から酒瓶が見えた。それを手に取ろうと左手を動かすが、なかなかいうことを効かない…ケープの隙間から左手が出て、それを見るとＨＧの拳銃を握ったままだった。それを見て拳銃を放そうとするが、指が硬直したように動かない。バスケットに通した右腕をバスケットの持ち手から抜き取り、左手の銃を放そうとする。

「あっ…安全装置」

ＩＹは震える右手で拳銃の安全装置をかけ、続いて拳銃を握っていた左手の指を一本一本放す。全部の指が離れたところで、拳銃が膝の上に落ちる。それを見てＩＹは

「よかったぁ…ここで暴発したら大変な事に…」

と自分の今までの考えと異なり生きている事を感じた。そう考えたら、心も体も宙に浮いたような感覚を覚えた。

その余韻を感じてすぐ、

「喉が渇いた…」

と言って、右手でバスケットから酒瓶を取り出し、栓を開けて直接に口に流し込んだ…

「あっ、これシェリー酒…」

思う間もなく、シェリー酒を口いっぱい流し込み、あまりの喉の渇きに負けて飲み込んだ。一気に大量のシェリー酒を口に入れたので逆にむせてせき込む。口から吐き出したシェリー酒が腹から膝の範囲にかかり、当然膝の上にあるＨＧから借りた拳銃にもかかる。

「ヤバい！准尉に叱られる…」

とつぶやきながら咄嗟に利き手の左手でＨＧから借りた拳銃を握りしめた。しかし、胃に流し込んだ大量のシェリー酒が精神的な疲労も手伝い急に酔いが回って、拳銃を左手に握ったまま前に倒れこんだ。

林に到着したＨＧ一行…ＨＧのすぐ後ろについてきたＴＴに「後ろを頼む」と言付け、ＩＹを探す。ＩＹは林の中に続く街道には居ない。

薄暗い林の中を見回す。声を出してＩＹを呼びたいが、先程の仮想敵の正体が分からず声を出せない。ＩＹに自分の拳銃を渡したので、ＩＹが使用していた自動小銃を構え注意深くＩＹを探す。やがて林の中の木漏れ日が差す場所に赤いモノを見つけ走り寄る。

そこに、バスケットにもたれかけて倒れこんでいるＩＹ。ＩＹの腹部辺りから赤い血のようなモノが見えた。驚いたＨＧは仮想敵に襲われたのではないかと、周囲を警戒しつつＩＹに近寄る。どうやら仮想敵は居なくなったものと確信し、ＩＹ抱き起そうとして、ＩＹの肩に手をかけると、

「酒くさっ！」

酒の匂いがした。ＨＧの後からＴＴ、ＨＹ、ＩＦ達が近付いてくる。ＩＹの肩に手をかけているＨＧを見て、誰しもＩＹが仮想敵に襲われて重傷を負ったものと思った。しかし、ＨＧの「酒くさっ！」の一言に驚いた。

ＨＧがＩＹの肩を叩くと「うーん」と言う反応…この反応はケガとかじゃなく酔った人の反応そのものである。

安心して、その場にへたり込むＨＧ。ＨＹは倒れているＩＹの格好を見て、

「赤ずきんちゃんじゃなく、別の物語の風景ね」

と言って、スマートフォンを取り出し、電源を入れて写真を撮った。（ＨＹは、ＨＧが隊員全員にスマートフォンの電源を切る様指示した時には素直に従ったが、ＨＹは民間人であり、隣のＳ県領地の住民なので、ここで電源を入れても敵には悟られにくいと判断した…もっとも、ＨＹはカメラ機能だけで、位置情報機能、通話機能はＯＦＦにしている）

後から、その写真を見るとＩＹは童話の主人公の様に林の陽だまりの中に照らされて、バスケットにもたれかけて倒れている様な…ただ、左手に握り絞められたＨＧの愛銃、その脇には転がった酒瓶…そして、腹部と口から流れる赤い液体…

「サスペンスドラマの一シーンとかね…テーマ曲流したりして…（ジャンジャンジャーン！作者(笑)）」

ＴＴが笑いながら言う。

ＨＧがＩＹを抱き起すと、ＩＹの口からこぼれる赤い液体…腹部から膝にかけて同じく赤い液体…陽だまりとはいえ、一見腹部を撃たれたか刺されるかして口から血を吐いているように見える。ＨＧに抱き起されたＩＹを見て「まるで刑事ドラマのワンシーンね…」とＩＦまで言う。が、赤い液体の正体は、傍らに転がっているシェリー酒…その事を知れば滑稽としか言いようがない。それも、ＨＹは写真に収めた…後でＨＹがＩＹをからかうネタにされた。

「よっぽど緊張していたのねぇ…間違ってお酒を一気に飲んじゃったんじゃないの？」

と笑いながら言うＴＴ。

ＨＧは、ＩＹを突き放したいと思ったが、まずは自分の愛銃を取り返そうとした。しかし、愛銃はしっかりＩＹが握って放さなかった。銃の安全装置がかかっている事を確認し、ＩＹが拳銃のグリップではなくスライドを掴んでいるので、弾倉を抜いた。その際に、ＩＹの衣

服からシェリー酒がべっとりＨＧの手に付いた。それを見てＨＧは「なんじぁ！コリャーーァ」と言った。それを見ていたＩＦとＨＹは「「あんたのセリフじゃない！」」と突っ込みを入れていた。ＴＴ…ただ爆笑。

この先に早く進みたいＨＧは、林の先までの斥候を出した。

「…ったく、シェリーやベルモットって、赤い奴はべとつくんだよなぁ…それに、服に着くと落ちないし…」

と愚痴りながら、ＩＹを背負って歩き出す。その写真もＨＹは写した。

林の反対側の外れに到達すると、海が見えた。

「さて、目的地は目前だ。小休止！夜を待つ」

と言って、ＨＧ一行は林に潜んだ。

●渡海作戦

「…ここは？」

日没、ＩＹが気づいた。

「林の外れだ」

薄暗い中、ＩＹの傍らに居るＨＧが答える。

「私は…？」

「林の中で酔っ払ってぶっ倒れていたんで、俺が背負ってきた」

「ありがとうございます」

「こーんな感じで」

と、いつの間にかＨＧの隣に来たＨＹが先程撮った画像を見せる。それを見て、ＩＹはまだ酔っている赤ら顔を一層赤くして。

「ももも、申し訳…ウグ！」

「シー、大声を出すな！」
とＨＧに口を塞がれた。ＩＹが頷くとＨＧは手を離した。
「で、肝心な報告は？…事後だけど」
「報告ですか？」
「そうだ、斥候の役目は報告までと確認したよな」
「はっハイ！報告します。林の中の仮想敵はキノコ採取の人達でした。私は、その人達に准尉達がここに来ることを知らせ、口止めを依頼しました」
「よし、ご苦労様。…で、祝杯に酒瓶開けて一気飲みかぁ？」
とＨＧがからかうように言った。
「違います！喉が渇いていたのは認めますが、あの瓶にお酒が入っているとは思いませんでした。多分水だろうと思って…つい…」
「そうか…はは、それは悪かったな」
と言って、ＨＧはＩＹを抱き寄せるようにして頭をなぜた。そして、ＩＹの右耳に小声で
「(もう死にたいと思わなくなったかい？)」
と訊ねた。
「(…はい、死ぬのは怖いと感じました)」
ＩＹもＨＧに囁くように返事をした。
「よろしい！」
と言って、ＨＧはＩＹの肩をたたいた。

夜中になり、ＨＧは
「さて、諸君。もうひと踏ん張りだ。誰か漁港まで斥候に行ってくれ」
「私、行きます」

ＩＹが手を挙げた。それを見てＨＧは
「お前さんは先程十分な働きをしてくれた。それにまだ酔っているだろう…」
「大丈夫です。私に行かせてください！」
「ＩＹ。ちょっとこい」
ＩＹがＨＧの近くに来ると、ＨＧはＩＹ呼気を確認し、
「まだ、酔ってるからダメ」
と言った。不服そうなＩＹにＴＹが
「わたしが行きます」
と言った。ＨＧは、今度はＩＦに対してＴＹの名誉回復がかかっていると考え、
「頼む」
と言うと、ＴＹはＨＧに敬礼し、銃を構えて一人林から出て行った。

３０分後、ＴＹが返ってきた。
「准尉、報告します。目的地の漁港には敵影はなし。ただし…」
「ただし？」
「船がありません」
「なんだって！」
ＩＦはＴＹの報告に驚いた。ＴＹは続けて
「漁港の人の話では、正規陸軍の兵士が来て、漁港にあった船を残らず沈めたそうです」
「そりゃ、かわいそうに…商売あがったりだな！それから、正規陸軍の株が下がったね」
ＨＧが呑気に言うと。
「とりあえず、漁港まで行こう」
と続けた。

「行ってどうするの？船がないんでしょ？」
ＩＦが心配して訊ねる。
「漁港の船はね…」
と意味深に含むような笑い顔でＨＧは言った。

●行く人、残る人
漁港に着くと確かに防波堤の中は沈没した漁船が確認された。
「ほら…やっぱり」
ＩＦが言うと、ＨＧは余裕で
「大丈夫だって」
月明かりの中、しばらくして沖の漁から戻ってきた中型船が見えてきた。
「ほら…ね。漁港はその港の小型船だけじゃなく、沖で操業していた船も魚を降ろしに来るんだ。再び漁に出るためにね…ここに沈んでいる小型船だと何隻も必要だが、あれだと一隻でかなりの人数を乗せられる」
ＨＧは接岸した中型船の船長とその場で魚の水揚げを始めた漁港の作業員に指示を出している漁労長に事情を話し、対岸に渡らせてもらうことを依頼した。ただし、一度に船に乗れる人数は１７人まで。ＩＦ、ＹＭを含む総勢は２５名、あとＨＧ、ＴＴ、ＨＹが居る。
「誰か、船が向こうから戻ってくるまで殿を務めなきゃならない。殿の指揮は俺が執る。志願するものは？」
「はい」「ハイ」「はい」…ざっと見ても、ほぼ全員…
「それじゃ、話にならん！ＹＭは、対岸に渡って、追加の船を確保。ＩＦも対岸に渡って、本部と連絡をとる。あと、ＹＭの支部の事務屋と軽症者…確か３人程居たな。そいつらも向こうに行け。それから、ＴＴお前は向こうに渡って、家に帰れ」

「私ですか？」
ＴＴが驚いて
「お前さんは、民間人だ。だから安全地帯に逃れる必要がある」
「それなら、准尉も同じじゃないですか。それに私は准尉の相方ですよ！」
「俺は、ＩＦに雇われた傭兵だ。ＴＴここまでの協力感謝する」
「私も残りますよ」
「ＴＴ…いうことを聞け！」
ＨＧが叱るように言うと、
「…わかりました」
ＴＴは項垂れた。
「わたしはぁ？」
ＨＹが自分を指さして言うと、
「お前は…微妙だなぁ…民間人だけど、こっちに車残しちゃってるからなぁ～、お前さんの判断に任せる」
「じゃあ、残ります」
ＨＹは嬉々として答えた。それを見て
「えー、私もー」
「ＴＴ！頼むから言うことを聞いてくれ」
「わかりました」
と、ＴＴは涙ぐみながら返事した。
「残り、１１人…じゃお前と…お前…」
と言いながら、ＨＧは適当に指さした。指名されたものは全員残念そうな顔をした。
「それから、そこの酔っ払い！」

と言って、最後にＩＹを指さした。
「ハイ！」
ＩＹは驚いて返事した。

「いいかぁ、お前ら、生き残るのも仕事だぞ」
「「はぁーーい」」
ＨＧに乗船を命じられた者達は皆やる気のない返事をした。その中には赤ずきん姿のＩＹも入っていた。
「おら！決まったらとっとと乗船！お前らがモタモタしていたら、それだけ俺達が帰るのが遅れる」
それを聞いて、乗船組は「「准尉を生きて返そう」」と言い合って、船に乗り込んだ。
船が出ていくのを見送り、ＨＧは残った者たちに対して、
「船が戻ってくるまで、港口の小屋に立て籠る。いいな」
「「ハイ！」」
その中にはＨＹがいた。
「装備確認！」
それぞれが持っている装備と、船に乗った者が残していった装備を報告した。その時ＨＧは自分の愛銃をＩＹがまだ持ったままな事に気づいた。ＨＧは仕方なく短機関銃を持つと、波止場の係留柵に片足を乗せて
「まっ、一戦できるか…」
と不敵な笑みを浮かべて言った。
「敵がくるのですか？」
と残った隊員が不安そうにＨＧに行った。

「来ないとも限らん」
とＨＧが不敵に笑って言うと、一部の兵は蒼くなった。その中でＨＹは「…これで葉巻でも咥えようものなら…任侠映画か戦争映画の見過ぎ」と突っ込みを入れていた。

●我慢の２時間半

船長が言うには、船が対岸につくのに約１時間、こっちに戻ってくるのは２時間半後…
ＨＧは残った隊員達と共に港口の小屋に行き、小屋の入り口に漁具や桶などの障害物や弾除けになりそうな物を並べ、小屋に立てこもった。
漁港入り口を見張っていると、軽軍用車両のエンジン音が遠くから聞こえる。その音が漁港に近づいて来るのがわかる。
途端に漁港の人達が建物の中に隠れていき、電気を消した。
やがて遠くにライトを煌々と点灯した軍用軽車両が一台近づいてくるのが見える。
「この静かな夜に、それも煌々とライトをつけて車でパトロールかよ…俺の部下なら、説教モノだな」
と愚痴るＨＧにＨＹは「この親父は…」と突っ込みを入れながら苦笑いする。
軍用軽車両がこの漁港を目的としているが明確になると、ＨＧは隊員達に
「全員、中に隠れて物音を立てるな！銃を構えて警戒態勢、安全装置外せ、たまーーぁこめ（弾薬ロード）！！」
と命令した。各自持っている銃の薬室に弾倉から弾丸を込める金属が擦れ合う音が室内に響く。途端に緊張感に包まれる。
漁港に軍用軽車両が入り、車から運転手を残して２人の兵士が降り立つ。２人の兵士は交互にバックアップの体勢で漁港の中を警戒して見て回る。
「なぁんだ…これだけは、キチンとしてるな」と小屋の入り口の隙間から除いていたＨＧは

兵士に対して突っ込みを入れていた。
漁港の建物を見て回る。事務所や建物の中を窓越しに小銃の銃身の下につけてあるライトを照らして覗く。中には漁港の人達が居るが、息をひそめているようだ。
港に使える船のない事を確認して、車に乗り込むと港の入り口に向かって、引き返した。
「(やれやれ、引き返すのか…)」と思っていたＨＧ。いきなり小屋の前で軍用軽車両が止まった。中から一人の兵士が降りてきた。
「(ヤバい、見つかったか！)」とＨＧ自ら短機関銃を入り口に向けて構える。後ろの隊員たちは、ＨＧが射撃を始めた場合、中から飛び出す体勢になった。
兵士は小銃のライトで小屋の入り口等を照らして確認している。そのとき、小屋の裏側でガサッと言う音がした。
ＨＧは後ろの隊員を手で制した。明らかに物音は小屋の外から聞こえた。
兵士が銃を構え、建物の横に回る。その時、小屋の裏から何かが飛び出した。兵士が慌てて銃口を向けると、ライトの中に魚を咥えた猫が伏せて兵士を威嚇していた。
「…なんだ、脅かしやがる」
「なにかいたのか？」
と車に乗った兵士が聞いた。
「ああ…猫がいた」
「早く、次行くぞ」
「おう」
兵士が車に乗り込むと、車は次の漁港に向かう道に向かった。
「…いやぁー、肝が冷えるぜ！」
と緊張から解放されたＨＧが額の汗をぬぐう。

「危機一髪でしたね」
「そうだな」
「准尉の親父ギャグより肝が冷えました…」
「なんだと、コノ！」
と言って、小屋の中で笑い声が響いた。

「そちら様も、ご無事な様で」
兵士が去ったのを確認して、小屋の外に出て背伸びをしているＨＧの所に、同じく事務所に隠れていた漁労長が皿を持ってやってきた。
「いやはや、緊張しましたな」
お互い、危ない目に遭った同士、気心が通じた。
「これは、あっちの事務所で焼いた干物ですが、よろしければお口汚しにどうぞ」
と漁労長はお皿に山ほどの小魚の干物を持ってきてくれた。
「これは、ありがたい！お心遣い、ありがとうございます」
ＨＧは丁寧に謝辞を述べて、皿を受け取った。皿を隊員に渡して、干物をかじりながら時計を見ると船がこっちの港を出て一時間ほど…内海は波穏やかで対岸の漁港の明かりが煌々と見える。「(今頃、Ｆ子ちゃん達、無事対岸についている頃だな…)」とＨＧはＩＦとＹＭ達を想った。

●同時刻
対岸のＯ県領地の漁港に近づいたＩＦ達は。いつもと変わらない作業をしている漁港の人々を見て安堵していた。
船が接岸すると、ＩＦは船長にお礼を言って、隊員達と装備を下した。すぐに船を返して

ＨＧを迎えに行ってほしいので、ＩＦは「いそげ！」と鼓舞していた。
ＹＭは作業しているＩＦとは別に、ＨＧ達が乗れそうな船を探したが、この港にいる船はいずれも小型船だけで、頼めるような中型船はなかった。事務所に行って訊ねたが、この付近にいる中型船は沖で漁をしているか、他の漁港からＹＭ達みたいにＦ県領地から逃げてくる人たちの運搬や、こちらからの物資輸送に出払っているとの事。
それを聞いてＹＭは肩を落とした。
事務所から気落ちして帰ってくるＹＭにＩＦが心配して
「どうだった？」
「このあたりの中型船は全部出払っているそうです」
「…そう」
ＩＦは乗ってきた中型船のブリッジに居る船長を黙って見上げた。それに気づいた船長は
「こっちから運ぶ荷物を積んだら、すぐに向こうに行くから安心しな！」
と言った。
「ありがとうございます」
ＩＦは深くお礼を言うと、隊員達をＹＭに任せて、自分は会社支給のスマートフォンから本部に連絡したが、相変わらず繋がらなかった。
「くそっ！」
ＩＦは持っていたスマートフォンを地面に叩きつけた。…もっとも、これくらいでは壊れる仕様ではないのであるが…
やがて、船がＨＧ達を迎えに出港する。それを祈るように見つめるＩＦとＹＭ達。
内海の波が静かなことが、彼女達の救いであった。

●エピローグ、撤退…でもまた来るかも…

Ｆ県領地の漁港にＨＧ達を迎えに来た中型漁船が接岸した。

船の持ってきた荷物の積み下ろしを手伝うＨＧ達。

荷物を下ろして、事務所倉庫に運び込むと、ＨＧ達残留組は船に乗り込んだ。

ＨＧは乗船前、漁労長と挨拶を交わした。

「元気でな」

「これは、戦略的一時撤退で、向こうで体勢を立て直して…多分、すぐにこっちに戻る羽目になると思います」

「そうかね」

と話をして、

「その時は、またよろしくお願いいたします」

「ああ…」

とＨＧは漁労長と握手を交わした。

「じゃ、出航するよ」

「船長、お願いします」

岸壁では、漁労長達が見つかる危険を顧みず、手を振っていた。

「お世話になりました」

ＨＧはじめ残留していた隊員たちは港の人達に向けて手を振って答えた。

「巻き込まれ親父の撤退　＝完＝」

「巻き込まれ親父の反撃に続く」